財団法人　市原市文化財センター調査報告書　第46集

―千葉県市原市―

草刈尾梨遺跡

1992

三井石油株式会社
財団法人　市原市文化財センター

序　　文

千葉県のほぼ中央に位置する市原市は，中央に養老川，北に村田川を擁し，自然と人の調和のとれた市であります。この恵まれた自然の下で太古の昔から，多くの人々が生活を営んできました。このため，市内には，貝塚や古墳，国分寺跡など数多くの遺跡が今に残されています。一方では，市内の地域開発は急速に進展してまいりました。そのため，これらの貴重な埋蔵文化財の保護と，生活に欠かせない開発との間に調和が強く求められるようになりました。

市原市と千葉市の境界を流れる村田川両岸にも，数多くの遺跡が残されています。昭和59年度に都市計画道路草刈・西広線の建設に先立ち実施された，村田川南岸の潤井戸西山遺跡の調査は，多くの成果が得られ報告書も刊行されました。

今回ここに報告する草刈尾梨遺跡は，潤井戸西山遺跡に隣接する遺跡で，ガソリンスタンドの建設に先行して調査を実施したものです。以前調査された潤井戸西山遺跡では，調査の結果弥生時代の環濠集落，古墳時代の集落，柵列や四脚門，奈良時代の掘立柱建物跡が発見され，遺跡の中心部分が今回の調査地点にあるだろうとの大きな期待がありました。

調査の結果，同じく弥生時代，古墳時代の集落が発見されました。さらに，今回発見された掘立柱建物跡と住居跡との関連から，以前の調査で時期を確定できなかった柵列が，古墳時代のものであることが類推できました。これは，北関東に多く存在する古墳時代の居館址と同様のもので，この地にもこのような豪族の館があったことは新しい発見でした。

本報告書は，この成果をまとめたものであり，研究者のみならず，広く市民の埋蔵文化財に対する理解に活用できれば幸いに存じます。

今回の発掘調査及び，本書の刊行に際し，千葉県教育庁文化課，市原市教育委員会文化課ならびに三井石油株式会社などの関係諸機関の御指導，御協力を頂きましたことに，厚く御礼申し上げます。

平成３年３月25日

財団法人　　市原市文化財センター
理事長　　星　野　一　郎

例　　言

1，本書は，千葉県市原市草刈字尾梨 193－1 他に所在する草刈尾梨遺跡についての調査報告書である。
2，調査は，三井石油株式会社による市原市草刈地区のガソリンスタンド建設に先行して実施したものである。
3，調査は，三井石油株式会社の委託を受け，千葉県教育委員会，市原市教育委員会の指導の下，財団法人市原市文化財センターが実施した。
4，発掘調査，整理作業は，下記のとおり行った。
　確認調査　平成２年10月１日～平成２年10月８日　担当　忍澤成視
　本 調 査　平成２年12月12日～平成３年１月20日　担当　半田堅三
　整理作業　平成３年６月１日～平成３年６月29日　担当　半田堅三
5，本書の執筆は，半田堅三が行った。
6，挿図中，・ーに続く数字は標高(単位ｍ)，遺物断面トーンは須恵器をあらわしている。
7，本遺跡は，潤井戸西山遺跡に続き，一体の遺跡と考えられる事から西山遺跡Ｂ地区の名称も用いられている。
8，財団法人市原市文化財センターの調査コードはセー125である。

財団法人市原市文化財センター組織表(平成２年度)

役　員		職　員	
理 事 長	星野一郎(教育委員会教育長)	庶 務 課	
副理事長	栗林　繁(教育委員会社会教育部長)	課　長	田丸萬富
常務理事	淵本献司(専任)	主　事	大鐘光江
理　事	滝口　宏(早稲田大学名誉教授)	主　事	永野健一
理　事	寺村光晴(和洋女子大学教授)	調 査 課	
理　事	海上信久(姉崎神社宮司)	課　長	矢戸三男
理　事	根本正夫(市企画部長)	主任調査研究員	田中清美
理　事	露崎　繁(市総務部長)	主任調査研究員	浅利幸一
理　事	石井作二(市財務部長)	調査研究員	大村　直
理　事	坂本忠夫(市都市計画部長)	調査研究員	近藤　敏
監　事	佐久間章(市会計課長)	調査研究員	高橋康男
監　事	小宮　仁(教育委員会総務課長)	調査研究員	木對和紀
		調査研究員	忍澤成視
		調査研究員	田中茂良
		嘱託調査研究員	田中新史
		嘱託調査研究員	半田堅三
		主　事	高浦貞子

財団法人市原市文化財センター組織表(平成３年度)

役　員		職　員	
理 事 長	星野一郎(教育委員会教育長)	庶 務 課	
副理事長	斎藤崇雄(教育委員会社会教育部長)	課　長	田丸萬富
常務理事	淵本献司(専任)	主　事	大鐘光江
理　事	滝口　宏(早稲田大学名誉教授)	主　事	永野健一
理　事	寺村光晴(和洋女子大学教授)	調 査 課	
理　事	海上信久(姉崎神社宮司)	課　長	矢戸三男
理　事	根本正夫(市企画部長)	主任調査研究員	田中清美
理　事	露崎　繁(市総務部長)	主任調査研究員	浅利幸一
理　事	石井作二(市財務部長)	調査研究員	大村　直
理　事	佐野年男(市都市計画部長)	調査研究員	近藤　敏
監　事	佐久間章(市会計課長)	調査研究員	高橋康男
監　事	小宮　仁(教育委員会総務課長)	調査研究員	木對和紀
		調査研究員	忍澤成視
		調査研究員	田中茂良
		嘱託調査研究員	半田堅三
		主　事	高浦貞子

目　　次

本 文 目 次

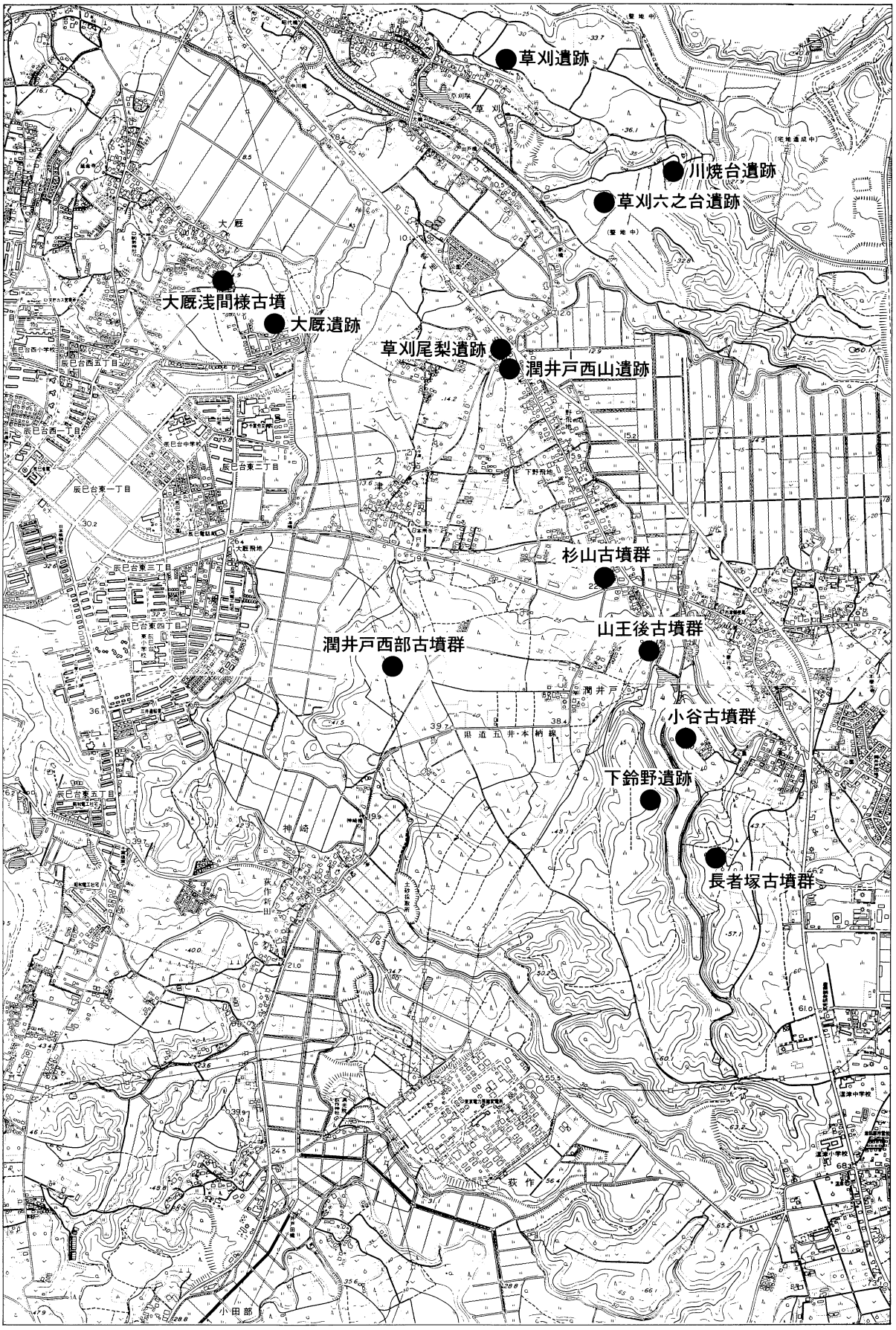
序　文
例　言
財団法人市原市文化財センター組織表　平成２・３年度
Ⅰ　調査の概要 …… 1
Ⅱ　調査した遺構と遺物 …… 1
　1，遺構の状態と重複関係 …… 1
　2，遺構一覧(1) …… 3
　3，遺構一覧(2) …… 20
　4，遺物観察表 …… 24
Ⅲ　まとめ …… 32

挿 図 目 次

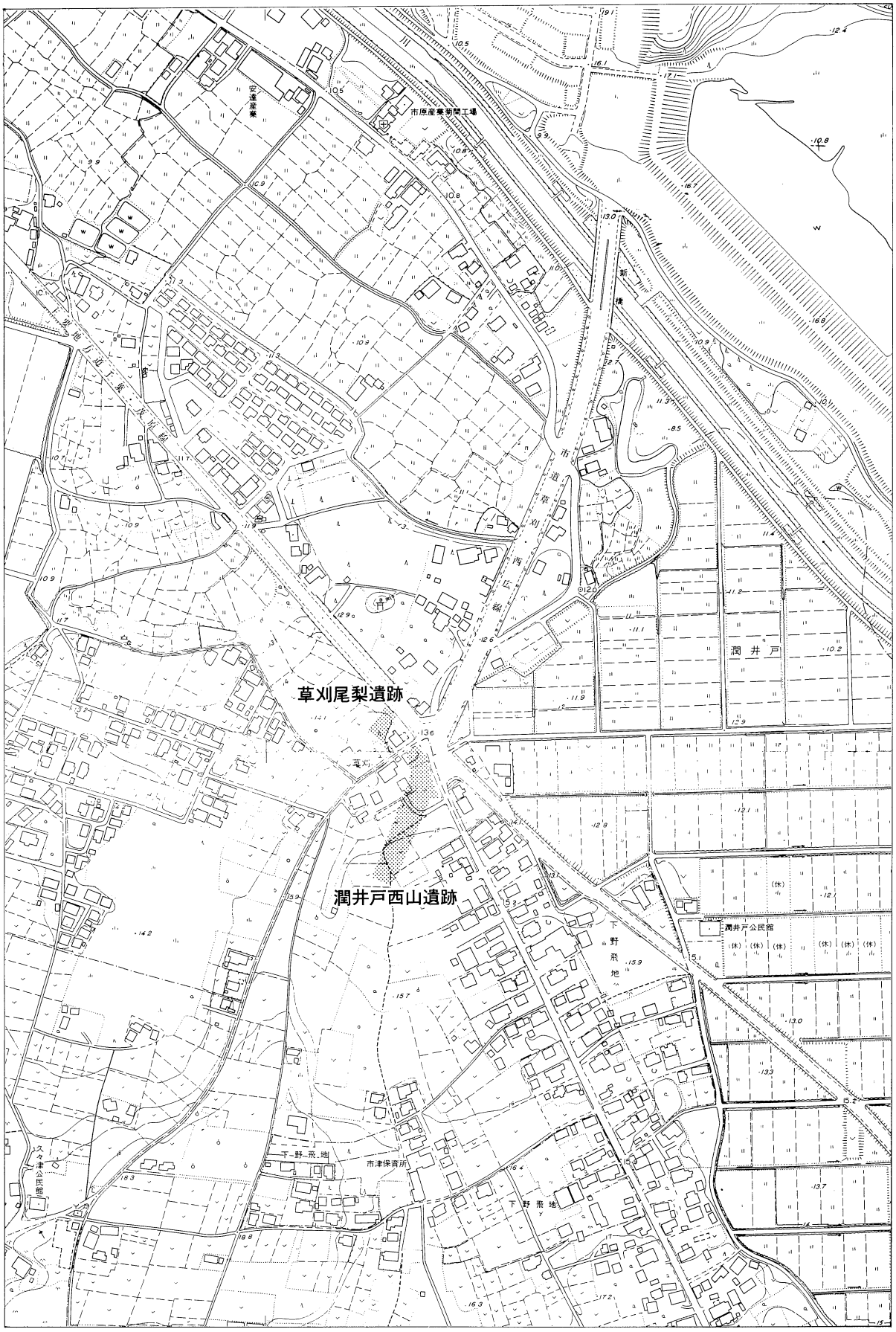
第１図　草刈尾梨遺跡と周辺遺跡 …… ①
第２図　遺跡の位置と周辺地形図 …… ②
第３図　草刈尾梨遺跡遺構配置図 …… ③
第４図　1・2号遺構と出土遺物 …… 6
第５図　1・2号遺構出土遺物 …… 7
第６図　1・2号遺構出土遺物 …… 8
第７図　3・4・5号遺構と出土遺物 …… 9
第８図　3・4・5号遺構出土遺物 …… 10
第９図　3・4・5号遺構出土遺物 …… 11
第10図　6・12－a・12－b号遺構 …… 12
第11図　6号遺構出土の須恵器 …… 13
第12図　7・8号遺構と出土遺物 …… 14
第13図　7・8号遺構出土遺物・11号遺構 …… 15
第14図　9号・10号遺構と出土遺物 …… 16
第15図　13・14号遺構と出土遺物 …… 17
第16図　13・14号遺構出土遺物 …… 18
第17図　13・14号遺構出土遺物 …… 19
第18図　1・2号掘立柱建物跡 …… 21
第19図　3号掘立柱建物跡 …… 22
第20図　4・5号掘立柱建物跡 …… 23
第21図　1号遺構出土遺物拓本 …… 27
第22図　9号遺構出土遺物拓本 …… 28
第23図　遺構外出土遺物拓本 …… 29
第24図　遺構外出土遺物拓本，石器実測図 …… 30
第25図　尾梨遺跡時期別遺構配置図 …… 31

写真図版目次

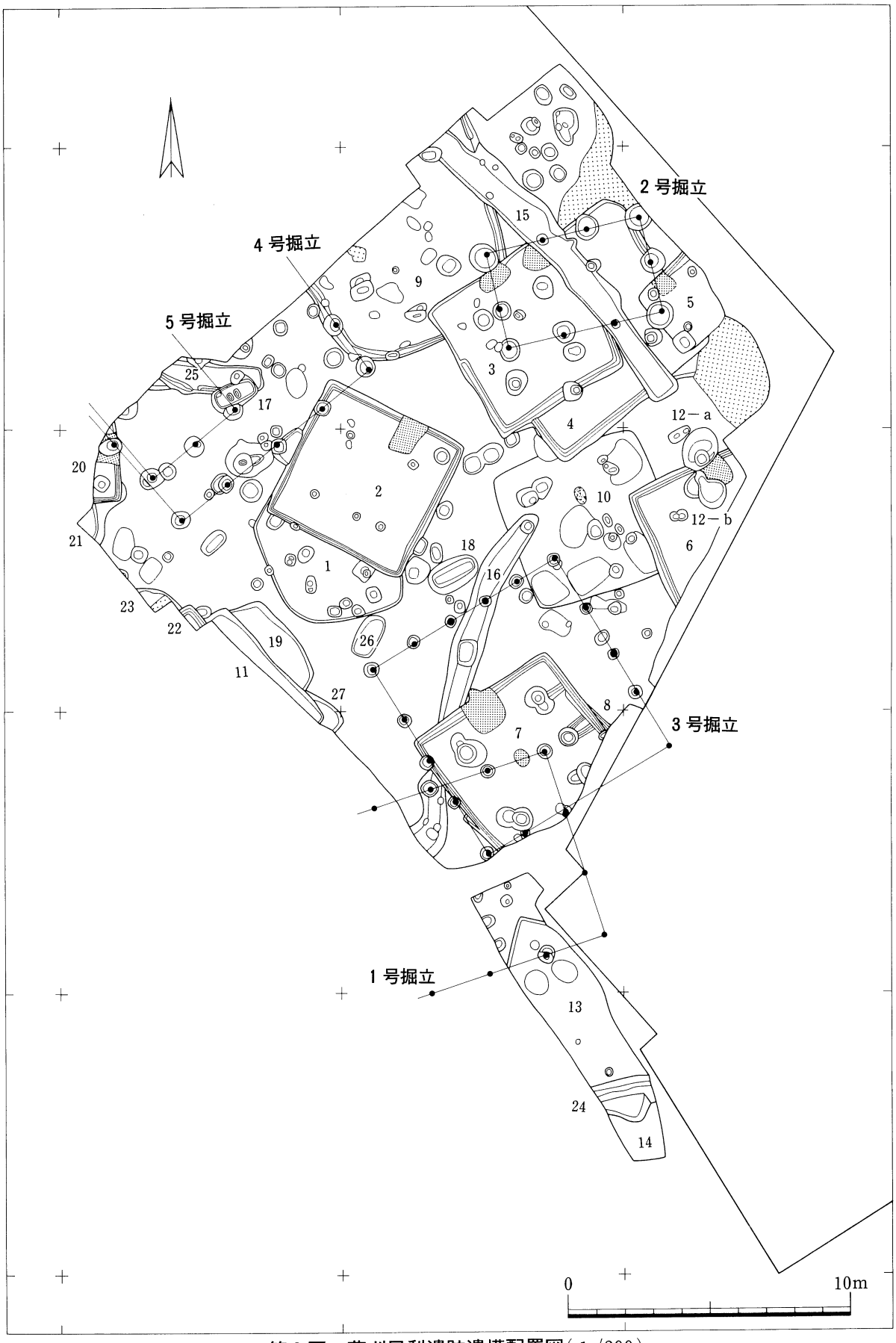
図版１　上　1・2号遺構，
　　4・5掘立柱建物跡確認状況
　　中　1・2号遺構
　　下　左　1・2号遺構遺物出土状況
　　右　18号遺構，1号遺構
図版２　上　3・4・5号遺構，2号掘立柱建物跡
　　中　9号遺構
　　下　3・4・5・15号遺構
図版３　上　6・12-a・12-b号遺構
　　中　7・8号遺構，3号掘立柱建物跡
　　下　7・8号遺構
図版４　上　13・14号遺構
　　中　17・25遺構
　　下　調査終了後全景(北側)
図版５　弥生時代までの遺物
図版６　古墳時代の遺物



第１図　草刈尾梨遺跡と周辺遺跡（１/10,000）



第２図　遺跡の位置と周辺地形図（１/5,000）



第 3 図　草刈尾梨遺跡遺構配置図（1 /200）

Ⅰ　調査の概要

千葉市と市原市の境界を流れる全長21ｋｍの村田川中流域は，北岸では千原台ニュータウンの造成工事に伴い，千葉県文化財センターにより多数の集落跡や古墳群が草刈遺跡群として調査されている。南岸は，東部から南部にかけて大厩遺跡，菊間遺跡，菊間手永遺跡，菊間古墳群，大厩浅間様古墳を中心とする大厩古墳群，杉山古墳群，山王後古墳群などがあり，さらに西には，古代官道と言われる山田橋表通遺跡，盤龍鏡を出土した諏訪台古墳群，「王賜」銘鉄剣を出土した稲荷台古墳群，上総国分寺，上総国分尼寺，貝塚や集落遺跡の密集した国分寺台の遺跡群がある。

草刈尾梨遺跡は，村田川中流域の南側で，南北にのびた舌状台地の東側にある。南側にある市道の建設に先だって，潤井戸西山遺跡が昭和58年度に調査され，縄文時代の陥し穴，弥生時代中期の環濠と住居跡，古墳時代前期～後期の住居跡，方形に区画する柵列とその南側に四脚門，奈良時代の掘立柱建物跡などが検出された。

調査地点は，標高14～15m，周辺から１～２ｍの低い台地上で，北東を主要地方道千葉･茂原線，南東を隣りの塀で囲まれた台形の部分と，南側の幅約２ｍの部分，併せて450㎡を調査した。今回の調査は，西山遺跡で検出された各時代の遺構の延長部分に当たり，確認調査でも多数の遺構があることがうかがえた。ただ，調査開始直前まで杉が植林された状態で，木の根が所によりローム層にまで達し遺構の上層の残りは良くなかった。そのため，重機を使いローム層より上の土をすべて排除して遺構を調査しした。

Ⅱ　調査した遺構と遺物

１，遺構の状態と重複関係

1・2・18･26号遺構　4号掘立柱建物跡

１・２号遺構は，調査範囲の中央部で重複している。１号遺構は北東３分の１を２号遺構に削平され，西側では掘り込みが浅く輪郭を捉えられなかった部分もある。両遺構の床や壁，周辺にピットが数多くあるが，２号遺構北西壁の４号掘立柱建物跡柱穴を除き，配列や組み合わせは不明だった。南東方向0.8mの間隔を置き18号遺構，南接するように26号遺構がある。他の遺構との重複関係はない。

新旧関係　18号遺構→１号遺構→２号遺構→４号掘立柱建物跡　〈不明〉26号遺構

3・4・5号遺構　2号掘立柱建物跡

調査範囲の北側で重複する遺構群で，３号遺構は２号遺構の東 1.3mにあり，北西で９号遺構を削平する。東寄りに大型の４号遺構，その東に５号遺構があり，いずれも西側の遺構を壊している。東は道路に続く撹乱があり，５号遺構の東と南は不明だった。３号遺構北東壁と４号遺構を壊し15号遺構がある。また，２号掘立柱建物跡の柱穴が住居跡と重複するが，３基の住居跡中最古の３号遺構のカマド煙道部が掘立柱建物跡の柱穴覆土中に造られ，掘立柱建物跡が古いことが判る。

新旧関係　９号遺構→２号掘立柱建物跡→３号遺構→４号遺構→５号遺構→15号遺構

6・12－a・12－b号遺構

西端で検出され，調査範囲外に続くため一部しか調査出来なかった。6号遺構は4号遺構の南，10号遺構の東を壊し北西部4分の1が確認された。住居跡の北壁を壊し径3mほどが撹乱されたようにロームで覆われ，取り除くと住居跡のカマドを壊し土壙が2基検出された。2基とも同様の性格の遺構と考え12号遺構とし，北から－a，－bとした。－a，－b間の新旧は不明である。

新旧関係　10号遺構→6号遺構→ {12－a号遺構 / 12－b号遺構}

7・8・16号遺構　1・3号掘立柱建物跡

1・2号遺構南にあり，南東は調査範囲外となる。8号遺構は北西壁にカマドがあり，北に若干移動して7号遺構が造られている。7号遺構床面に8号遺構カマド火床部が残り，壁や床面下に1・3号掘立柱建物跡の柱穴が検出された。また，西コーナー上に16号遺構がある。

新旧関係　1号掘立柱建物跡→8号遺構→7号遺構→3号掘立柱建物跡→16号遺構

9号遺構　15号遺構

調査範囲北端にあり北側3分の1が未調査の住居跡で，撹乱が多く床面の状態はあまり良くない。南は3号遺構，2号掘立柱建物跡，東は15号遺構に削平される。

新旧関係　9号遺構→2号掘立柱建物跡→3号遺構→15号遺構

10号遺構

中央にある住居跡で，北で4号，南で6号，西で16号遺構，3号掘立柱建物跡と重複している。

新旧関係　10号遺構→3号掘立柱建物跡→ {4号遺構 / 6号遺構} →16号遺構

11・19・22・27号遺構

大部分が西の調査範囲外に続く遺構群で，19・27号遺構は掘り込みが浅く，11号遺構はそれを切る方形の住居跡である。北西部にある22号遺構は，コーナーのみの検出で遺構の時期や大きさなどは不明である。

新旧関係　{19号遺構 / 27号遺構} → {11号遺構 / 22号遺構}

13・14・24号遺構

調査範囲南のトレンチ状発掘部分の住居跡で，北西と南東のコーナーが13号遺構のもの，南側が14号遺構の床面である。13号遺構の南コーナー付近で24号遺構が床面を一部壊し，北西柱穴付近で1号掘立柱建物跡の柱穴と重複している。

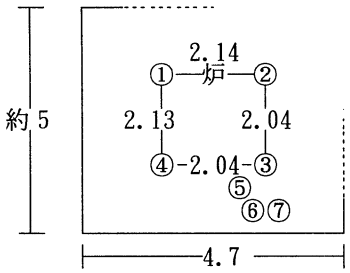
新旧関係　1号掘立柱建物跡→13号遺構→14号遺構→24号遺構

17・20・21・23・25号遺構　5号掘立柱建物跡

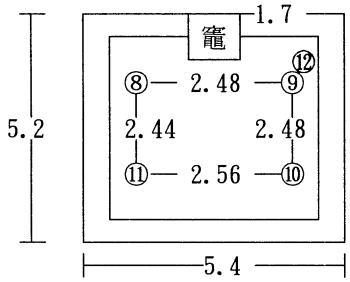
発掘範囲西コーナーに集中して発見された柱穴，ピット，住居跡で，17号遺構を除きいずれも調査範囲外に遺構が延びている。

新旧関係　17号遺構→25号遺構→ {5号掘立柱建物跡 / 20号遺構} →4号掘立柱建物跡

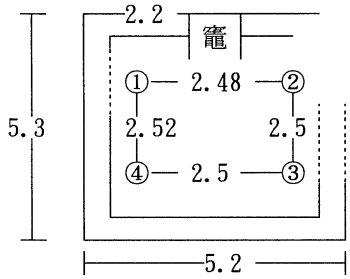
2，遺構一覧(1)掘立柱建物跡を除く　柱穴間，大きさ等　単位＝m　N－　単位＝°



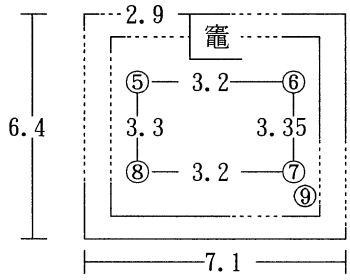
[1号遺構] 住居跡 宮ノ台 楕円形 N－11－W 壁＝傾斜を持つ 深＝0.17
炉　：2号遺構に削平され存在しない
貯蔵穴：2基⑥，⑦＝スリバチ形：⑥壁に接する：⑦ ③の南側
主柱穴：①②＝円形小：③④＝2段掘り込み：深＝0.4～0.55
床面　：軟弱
壁溝　：存在しない
出入口ピット：⑤やや横長の楕円形
①～③を結んだ線から北東を2号遺構に削平される
床面にある多数のピットは後世のもの
遺物　：●印 甕 壺など



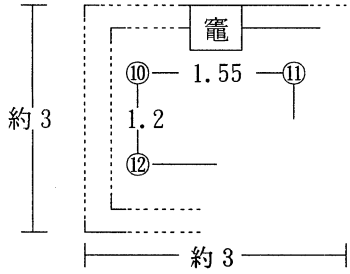
[2号遺構]：住居跡　鬼高　方形　N－29－E　壁＝垂直に立つ　深＝0.3
カマド：1.5×0.8：粘土多 良く焼ける 袖天井：燃焼部に焼け落ちる
貯蔵穴：径＝0.55：深＝0.65
主柱穴：円形：深＝0.5～0.55
床面　：平坦で硬い貼り床：③④間貼り床下から1号遺構②検出
壁溝　：全周
焼土　：南東壁際に多く堆積：火災住居
遺物　：カマド内＝甕破片 焼土中＝杯・高杯9点以上 ⑧西＝はそう
土製紡錘車2 砂岩製小型砥石1 刀子断片1



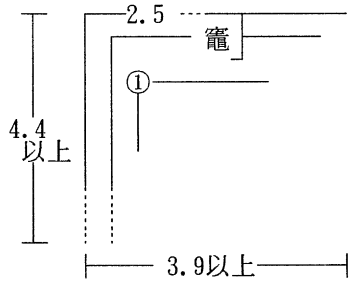
[3号遺構]：住居跡 鬼高 方形 N－27－W 壁＝垂直 深＝0.35
カマド：0.5×1.2：4号遺構に両袖を破壊され残存状態不良
貯蔵穴：存在しない
主柱穴：径＝0.7～0.9：深＝0.6～0.8：上部が大きく開く
床面　：4号遺構貼り床構築時に破壊される
壁溝　：南側で検出したが本来は全周していたものと思われる
遺物　：②中段：杯 カマド内部：甕の破片



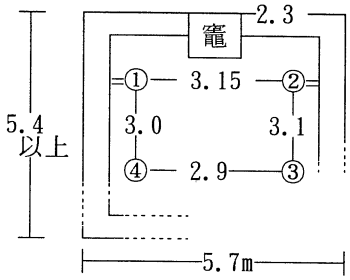
[4号遺構]：住居跡 鬼高 長方形 N－38－E 壁＝垂直 深＝0.3
カマド：0.9×0.7：煙道＝0.3三角に突出：東15号遺構に壊され状態不良
5号遺構カマド跡北側焼る 貯蔵穴の位置から北東壁にあったカマドが西に移築れたものである
貯蔵穴：隅円方形＝0.75×0.75：深＝0.8
主柱穴：⑤⑥＝やや細い2段掘り込み：⑦⑧＝上の開く2段掘り込み
焼土　：南半に集中　火災住居
床面　：ローム　粘土を含む厚さ0.1ほどの貼り床
壁溝　：検出は部分的だが本来は全周していたと思われる
遺物　：南半の焼土中から杯　甕　カマド上で支脚



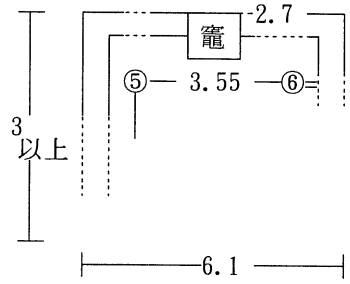
[5号遺構]：住居跡 鬼高 方形 N－47－W 壁＝一部分のみ確認 深＝0.3
カマド：粘土の使用が少なく撹乱のため詳細は不明
貯蔵穴：なし
主柱穴：1本未検出 ⑩2号掘立柱穴中に底部に粘土を敷いて造られる
床面　：ローム主体の貼り床 木の根で撹乱される
壁溝　：部分的に確認
南側は撹乱 東側は道路で削平される



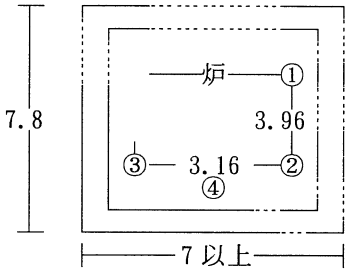
[6号遺構]：住居跡 鬼高 方形 N－24－W 壁＝垂直 深＝0.35
カマド：12号遺構に壊され右袖のみ残存 上部削平
貯蔵穴：未確認 未発掘の部分に存在する可能性あり
主柱穴：①のみ検出：深＝0.55 2本組みで外側ピット上は貼り床される
床面　：硬質で平坦な貼り床
壁溝　：検出部分で全周
遺物　：床にわずかに散在 須恵器 甑底部など



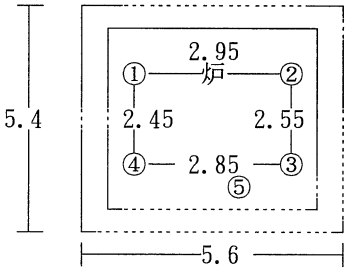
[7号遺構]:住居跡 鬼高 方形 N－34－W 壁＝垂直 深＝0.5
カマド:1.3×1.35:煙道＝0.35台形
貯蔵穴:なし
主柱穴:①～③２本組み:深0.75と0.5の２組:浅＝古 上に貼り床がある
床面 :ロームを叩き締めた貼り床 ②，③から壁溝に間仕切溝
壁溝 :全周
遺物 :カマド近くの床面から滑石製模造品３点出土



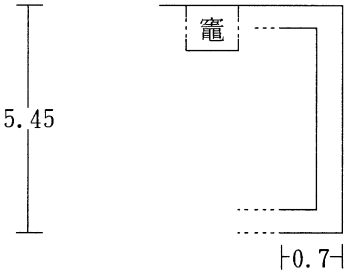
[8号遺構]:住居跡 鬼高 方形 N－51－W 壁＝垂直 深＝0.4
カマド:７号遺構床下に火床面のみ残存
貯蔵穴:不明
主柱穴:２本のみ検出:⑥から壁溝に間仕切溝
床面 :７号遺構より浅く大部分削平 西コーナー北東壁部分的に検出
壁溝 :部分的に検出 本来は全周していたと思われる



[9号遺構]:住居跡 宮ノ台 楕円形 N－16－W 深＝０～0.1
炉 :未発掘部分に存在すると思われる
貯蔵穴:未検出:３号遺構内に存在した可能性もある
主柱穴:３本検出:深＝0.85～1.05
床面 :ローム時直床，撹乱は多いが堅緻
壁溝 :調査範囲で全周
出入口ピット:横長楕円形
覆土が浅く遺物は細片となっている



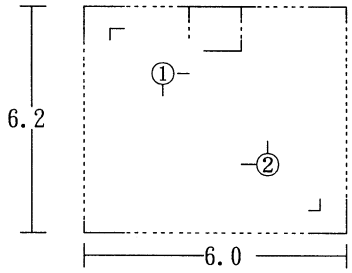
[10号遺構]:住居跡 五領 隅円方形 N－22－W 壁＝確認されず 深＝０
炉 :0.7×0.4 ①②の間やや南より 良く焼けている
貯蔵穴:なし
主柱穴:深:0.25～0.55 ④は３号掘立の柱穴と重複している
床面 :炉の周辺のみ確認
壁溝 :痕跡的に確認
木の根による浅く広い撹乱が多い



[11号遺構]:住居跡 鬼高 方形 N－40－W 壁＝垂直 深＝0.7
カマド:北西側の未発掘部分に存在するようで未確認
貯蔵穴:未検出
主柱穴:未検出
床面 :厚さ0.2ほどの粘土の多い貼り床
壁溝 :調査範囲で検出
遺物は わずかな細片のみ

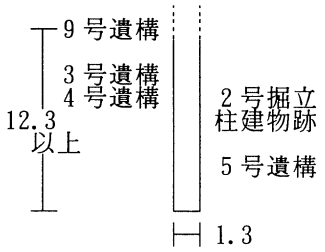
[12－a号遺構]:土壙墓 東西に長い楕円形 1.55×1.17 深＝0.75
６号遺構北側 北１段深 南の段と北の掘込みの間ピット状に深くなるロームの多い土で埋め戻される
遺物 :時期判定のできない小破片数点

[12－b号遺構]:土壙墓 瓢箪形 径１北西に突出部 深＝0.55
６号遺構カマド西から南，ロームの多い土で埋め戻される
遺物 :突出部本体境界近く骨片，貨幣７(寛永通宝)が検出された
骨片:頭蓋骨片 ６×10ｃｍほど他の骨は見つからなかった
貨幣:１枚が上層に，６枚は錆付き人骨と同層位で検出

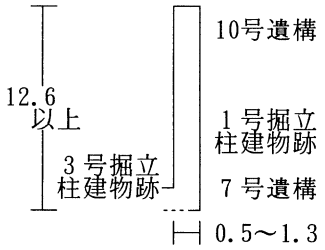


[13号遺構]:住居跡 鬼高 方形 N－13－E 壁＝垂直 深＝0.35
カマド:発掘区域外北東側に存在したと思われる
主柱穴:２本確認 柱穴の間隔は約３程と推定　深＝0.4～0.5
貯蔵穴:不明
床面　:木の根による撹乱が多く軟弱
壁溝　:不明
遺物　:床面の残存状態のいい①近くに集中

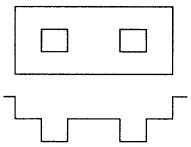
[14号遺構]:住居跡 鬼高 不明 壁＝未検出 深＝0.1
13号遺構の南側で床面のみを検出した 形態詳細は不明
出土遺物から13号遺構に近い時期の遺構と考えられる



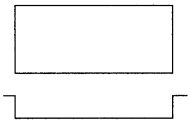
[15号遺構]:溝 時期不明 断面＝逆台形 N－40－W　深＝0.3～0.5
５号遺構南東から調査範囲外に続く わずかに西に屈曲するが直線的
覆土:よく締まった粒子の細かい黒色土
壁　:急角度に立ち上がり北寄りでは北東壁が２段になる
底面:平坦で硬質



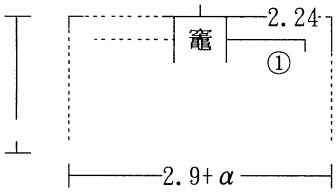
[16号遺構]:溝 時期不明 断面＝船底形 深＝0.1～0.3
10号遺構西から若干ほぼ南北で調査範囲の南端で西に曲がる
覆土:締まった黒色土中に踏み固められた面がある
壁　:緩やかに立ち上がる
底面:平坦で硬い 部分的に土壙状，ピット状のくぼみがある



[17号遺構]:陥し穴 N－70－E 幅＝1.73 長さ＝0.92 深＝0.6
上層に浅い溝状の遺構と掘立柱建物跡の柱穴がある
覆土:ローム主体の土で埋っている
壁　:平坦に削られ硬い
底面:平坦で硬い，ピット２箇所検出:長方形深＝0.15



[18号遺構]:陥し穴 N－65－E 幅＝1.07 長さ＝1.88 深＝0.85
覆土:ローム主体で上層に焼土が混入している
壁　:平坦に削られしっかりしている
底面:平坦で硬い，ピットは検出されなかった
[19号遺構]:住居跡 宮ノ台 楕円形 方向不明
11号遺構に大部分を削平され東側１/３程を検出した
１号遺構に近接し形態　床　壁の状況も類似している



[20号遺構]:住居跡　鬼高　N－86－E　壁＝垂直　深＝0.4
カマド:中央部を掘立柱建物跡の柱穴で破壊される
貯蔵穴:円形:径＝0.6　深＝0.65
主柱穴:調査範囲外
床面　:ローム主体，粘土混じりの貼り床
壁溝　:カマド東側で確認

[21号遺構]:住居跡　詳細不明

[22号遺構]:住居跡　鬼高

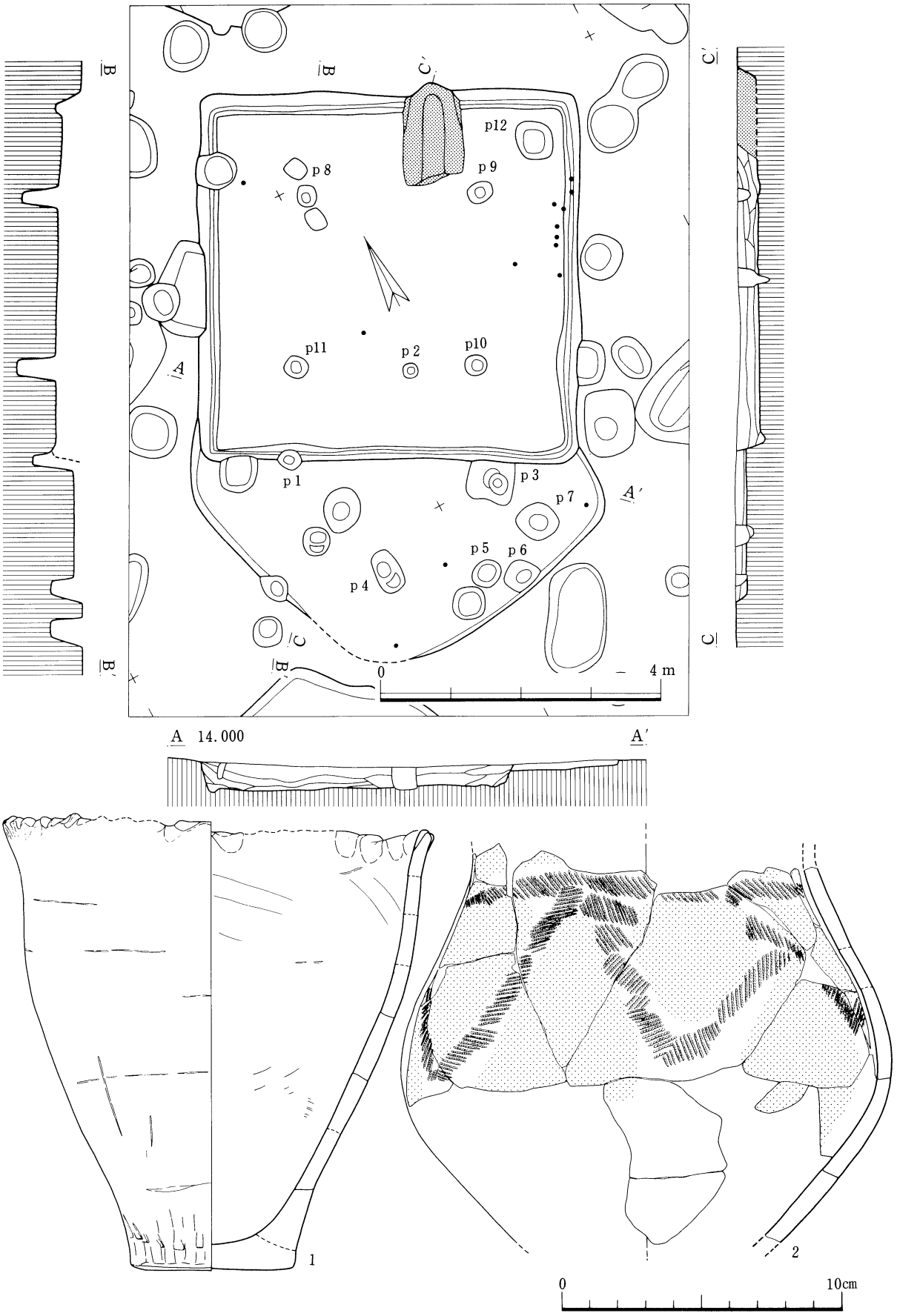
[23号遺構]:住居跡　詳細不明

[24号遺構]:溝　13号遺構を切る　16号遺構に類似した溝

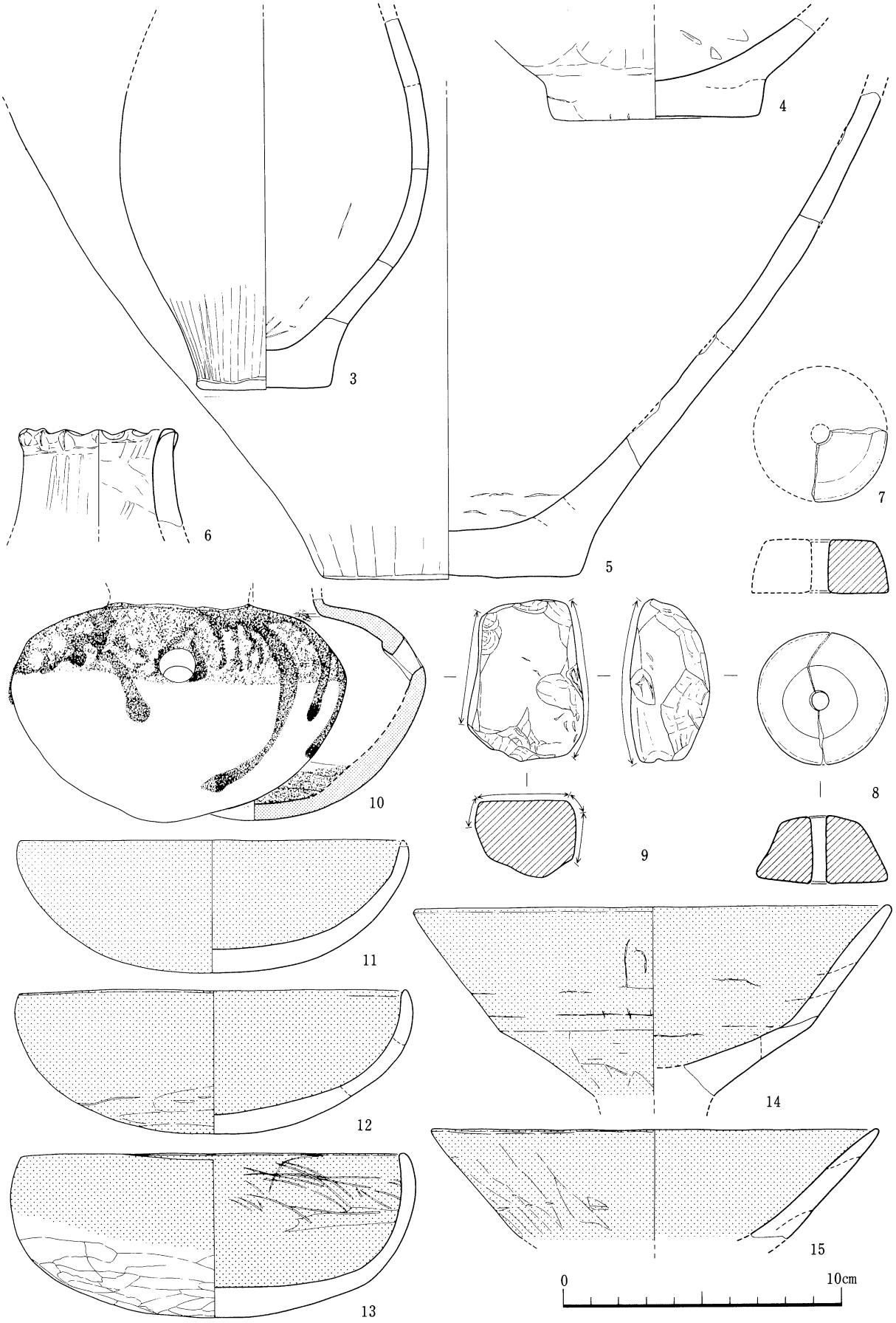
[25号遺構]:溝　５号掘立柱建物跡に切られる　溝底は比較的軟弱

[26号遺構]:ピット　１号遺構南　溝底･壁とも軟弱

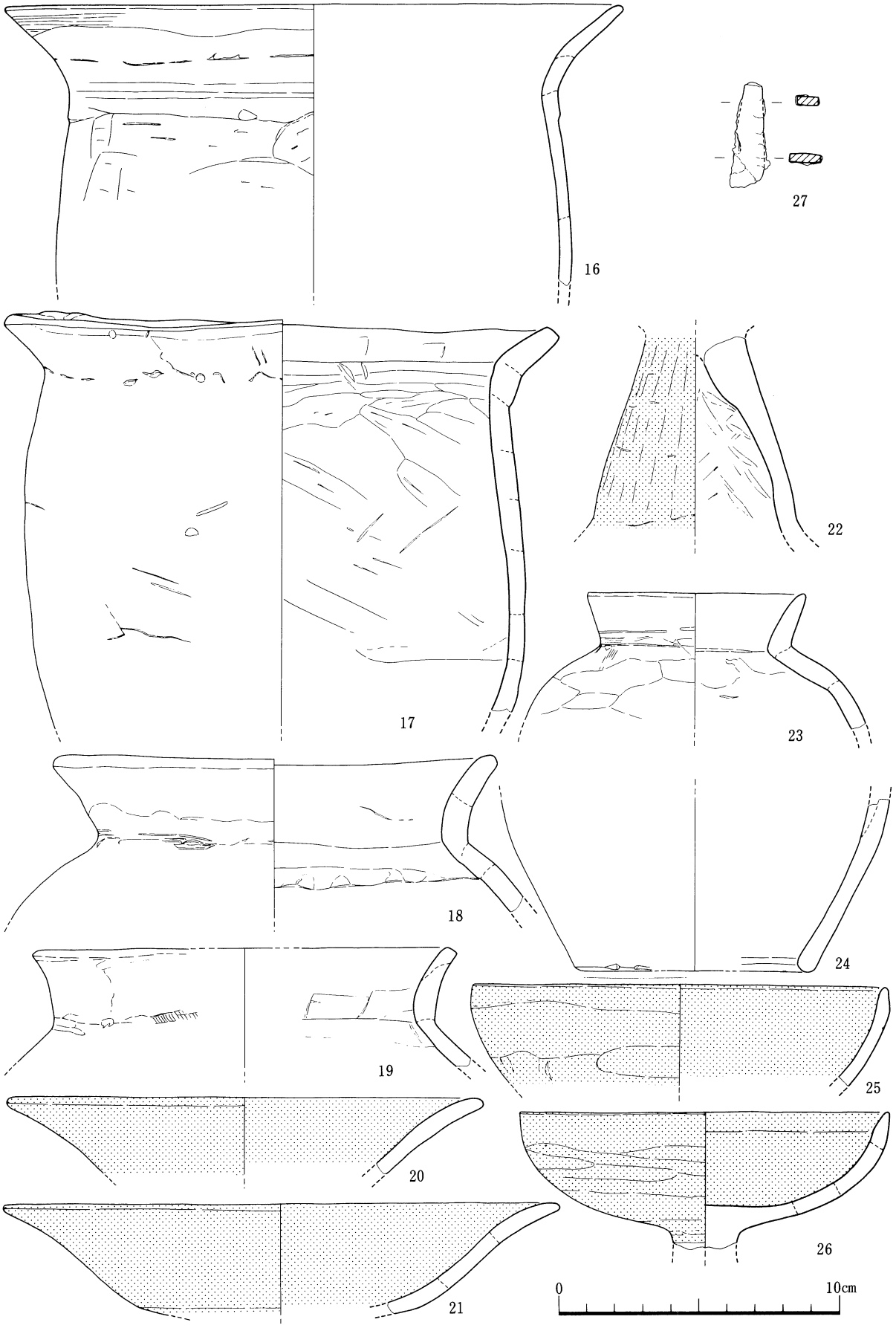
[27号遺構]:住居跡　11号遺構に大部分をきられる



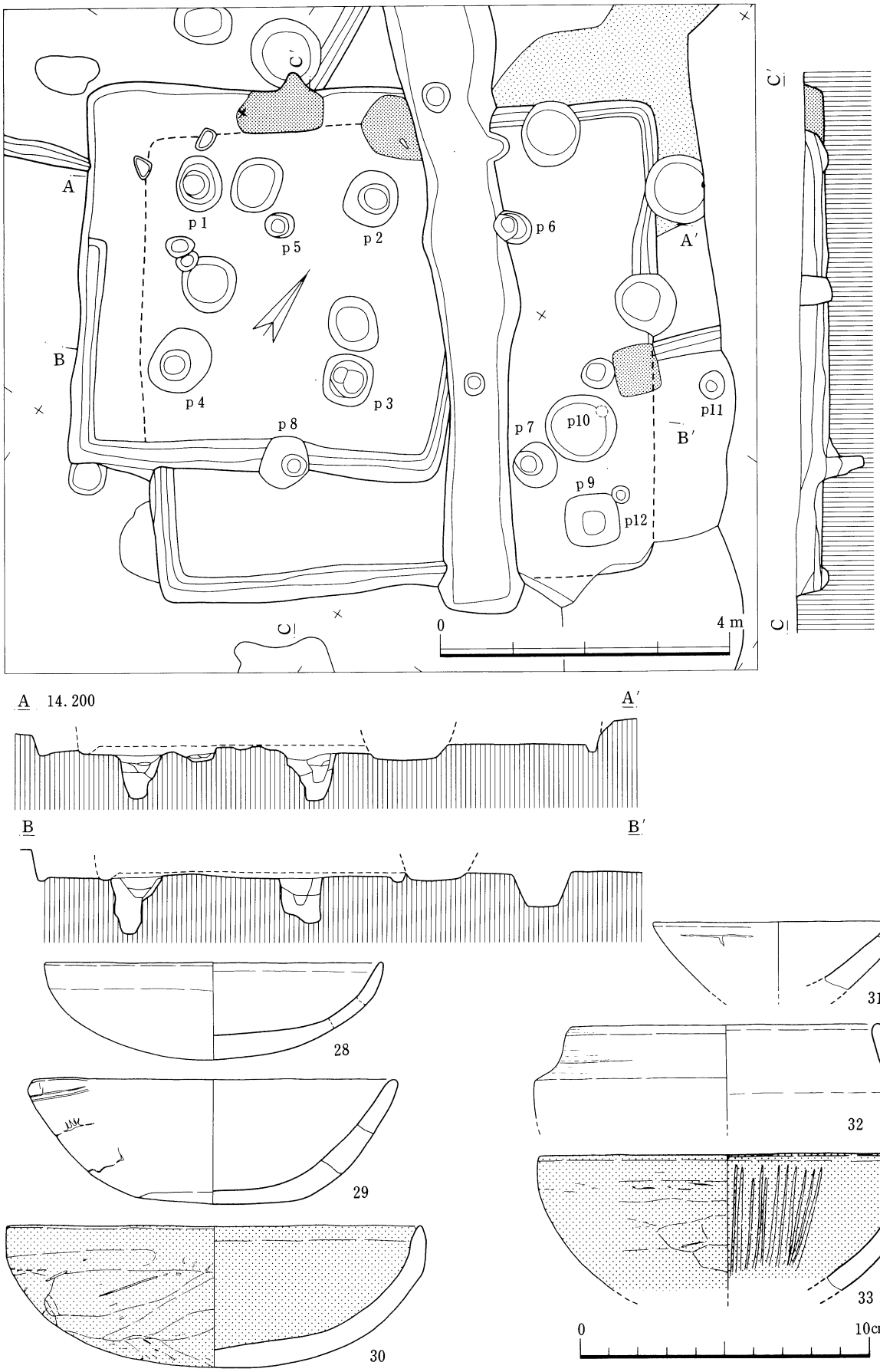
第４図　１・２号遺構と出土遺物



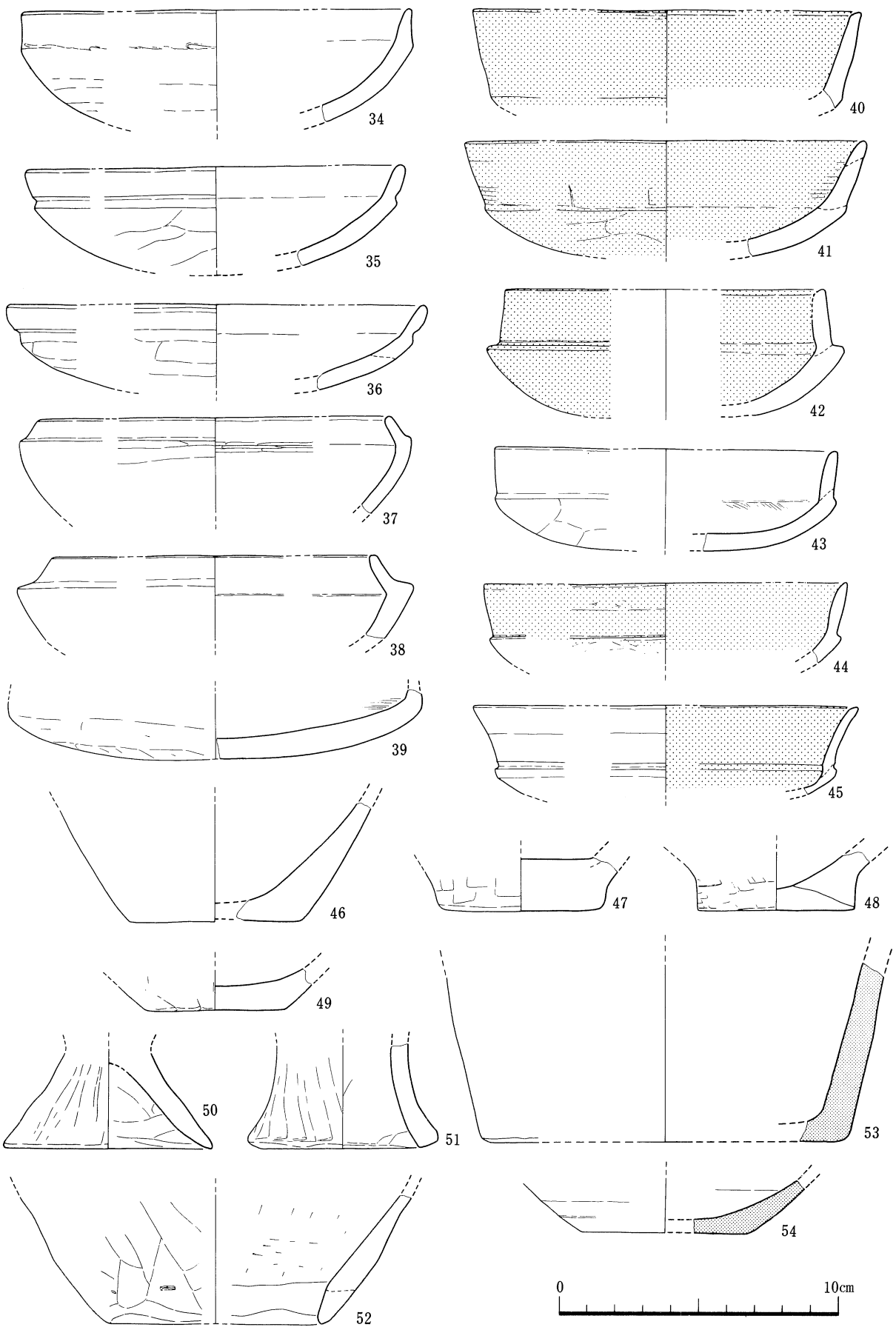
第5図　1・2号遺構出土遺物



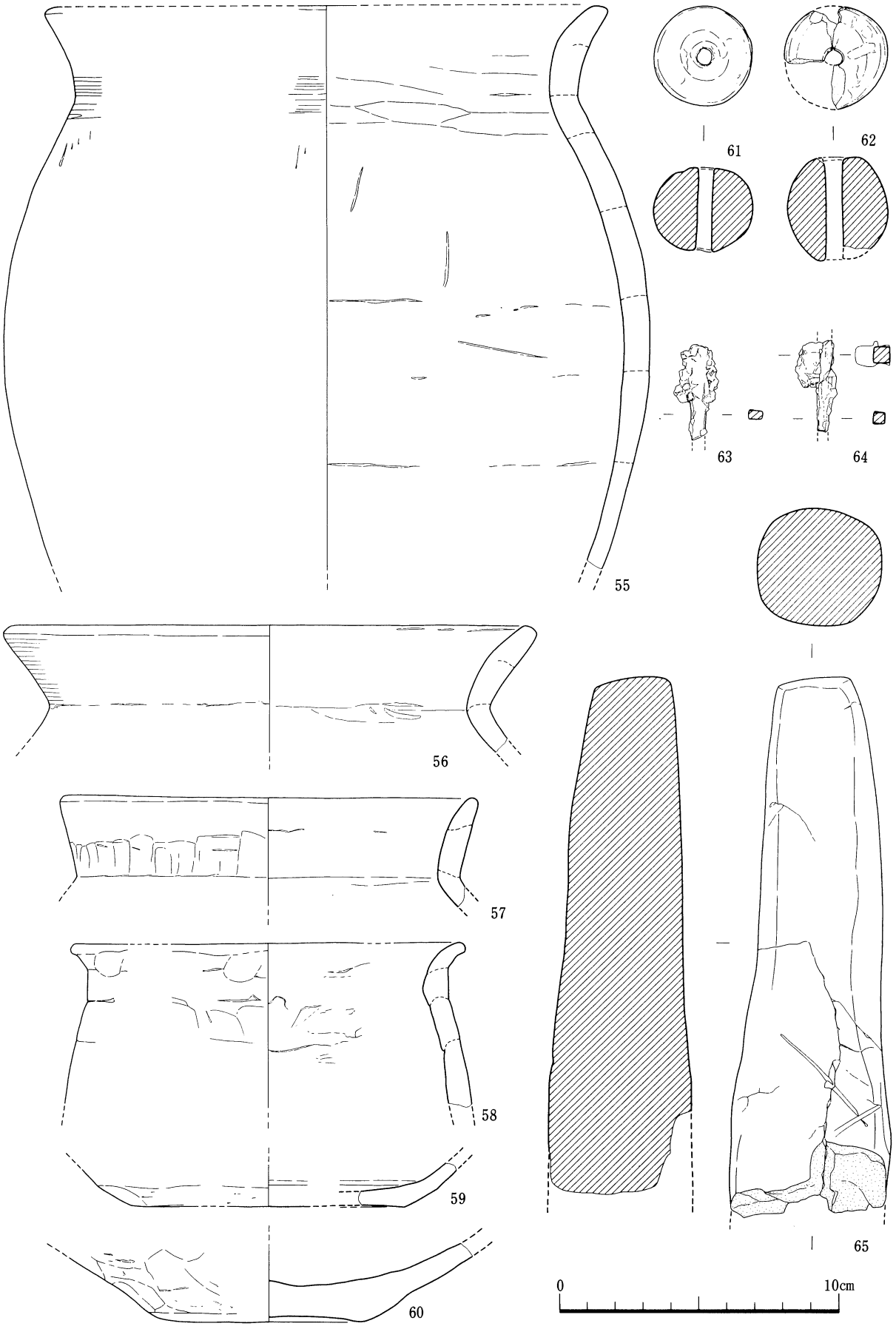
第6図　1・2号遺構出土遺物



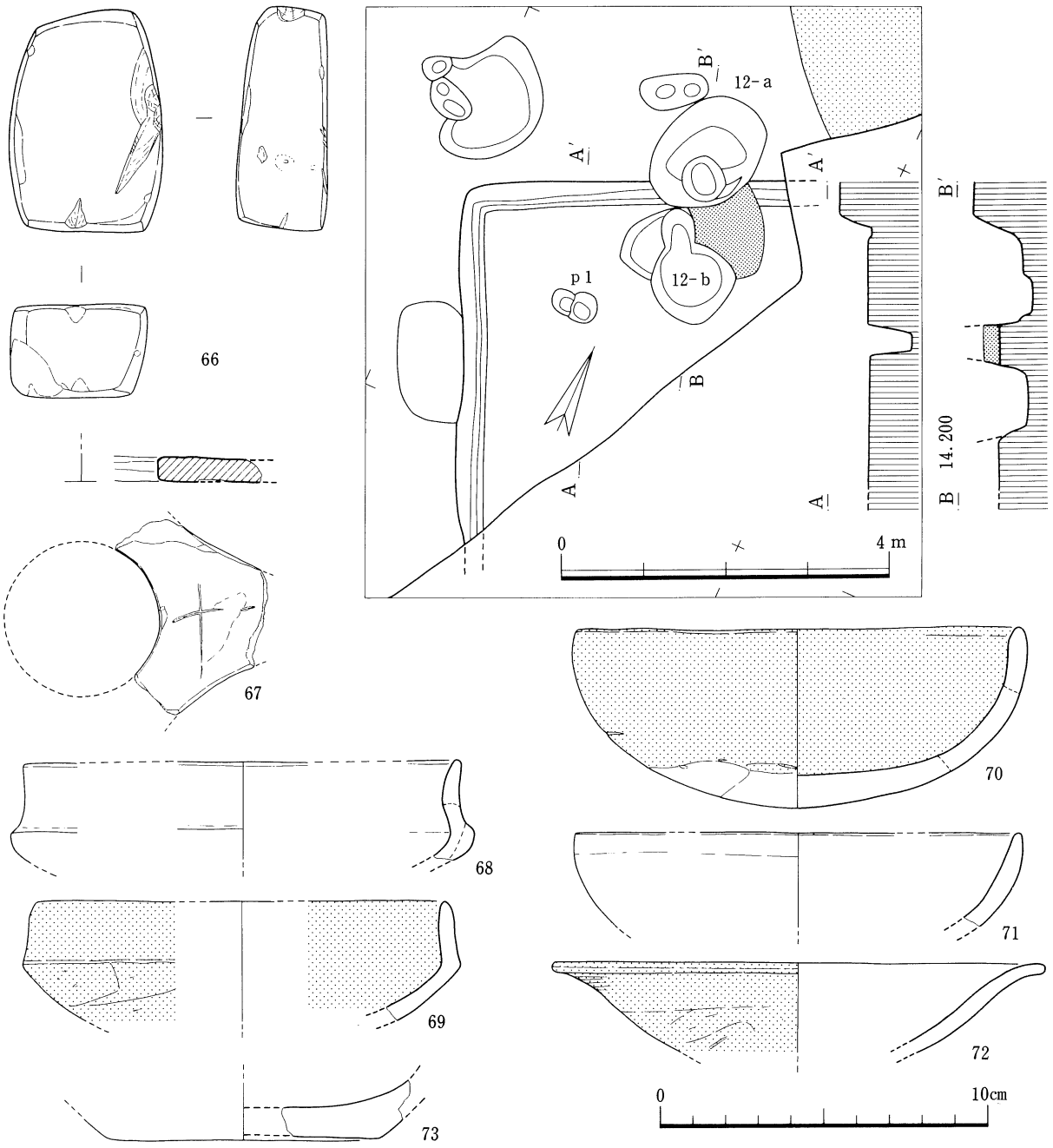
第7図　3・4・5号遺構と出土遺物



第8図　3・4・5号遺構出土遺物

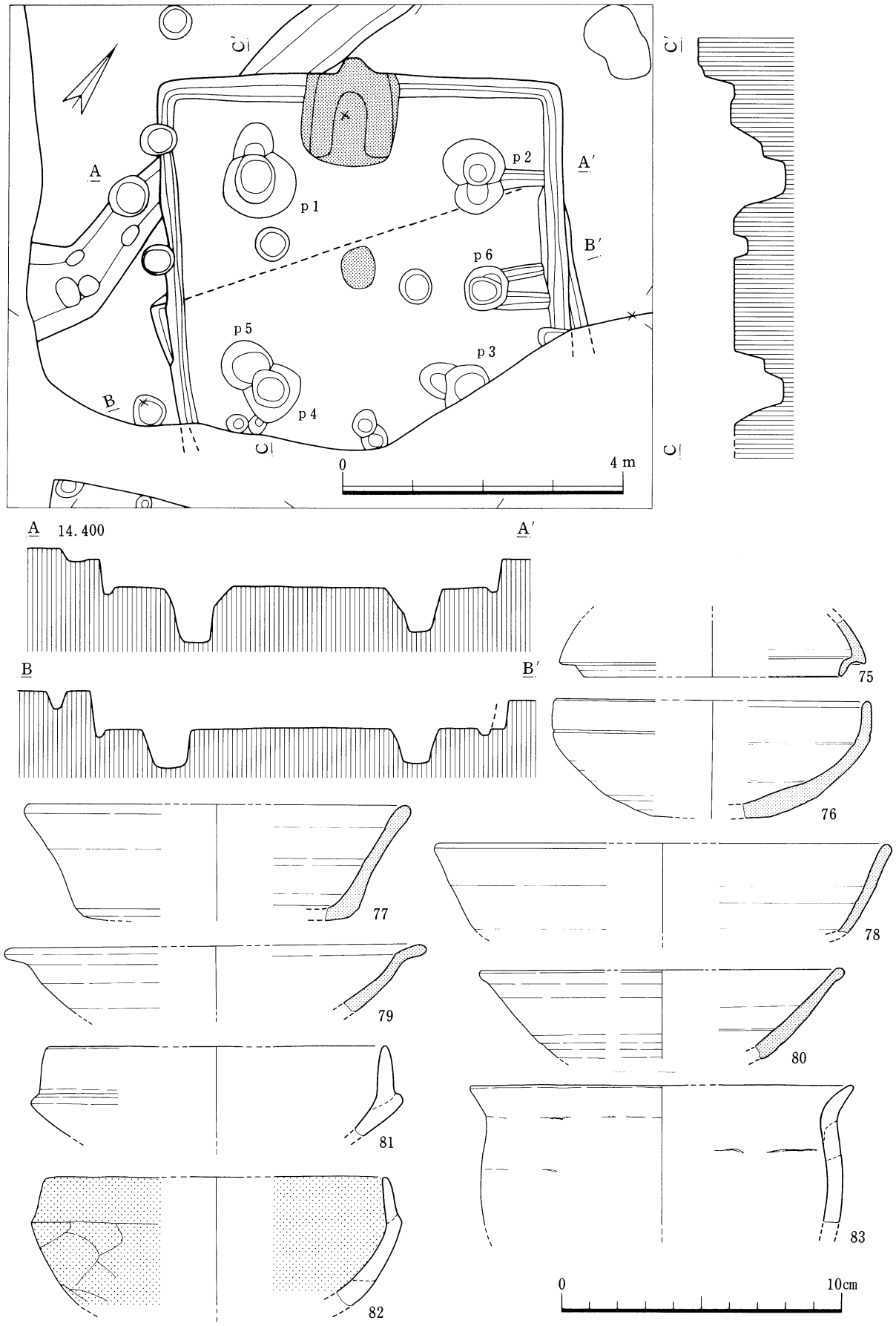


第9図　3・4・5号遺構出土遺物

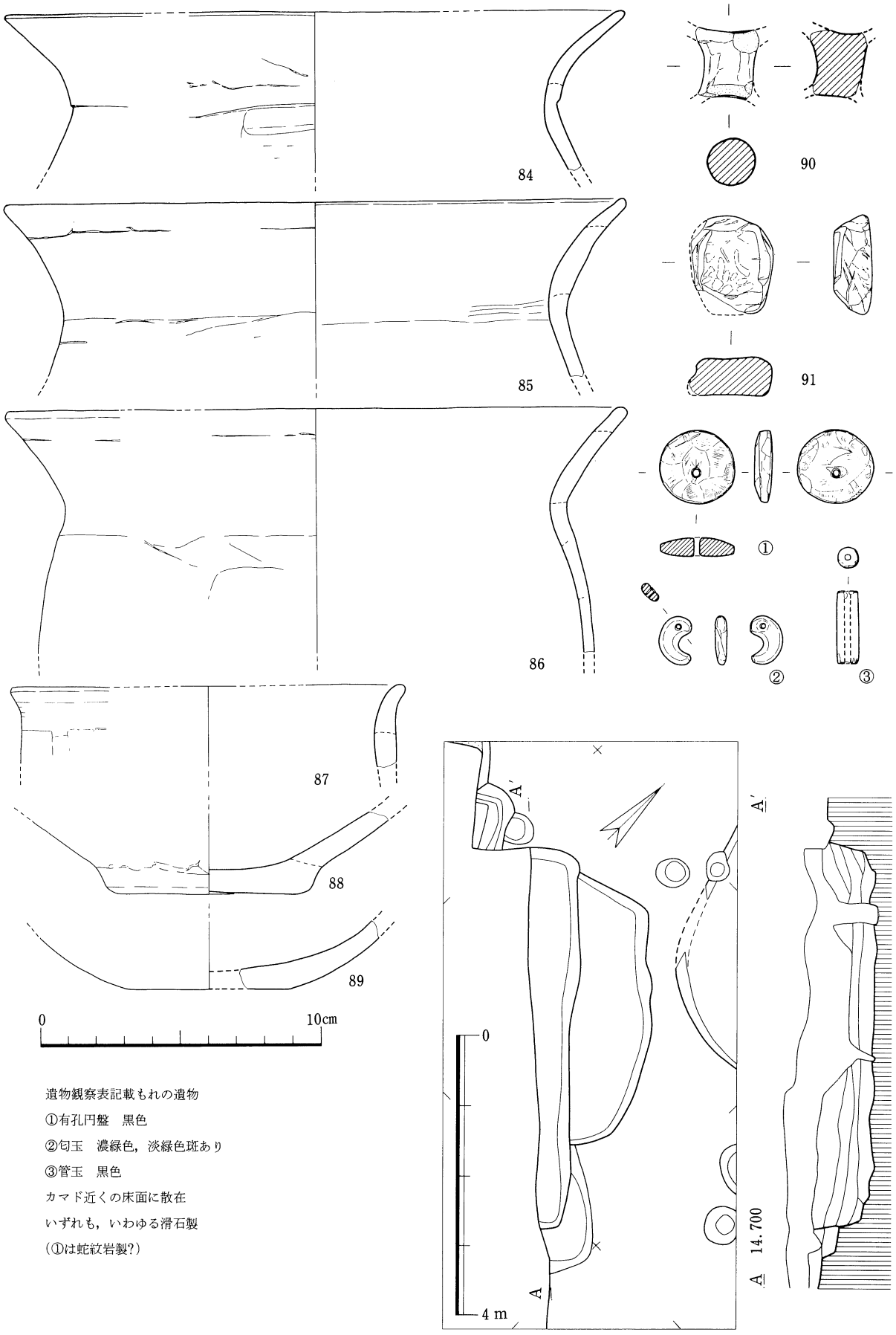


第10図　6・12―a・12―b号遺構と出土遺物

第11図　6号遺構出土の須恵器

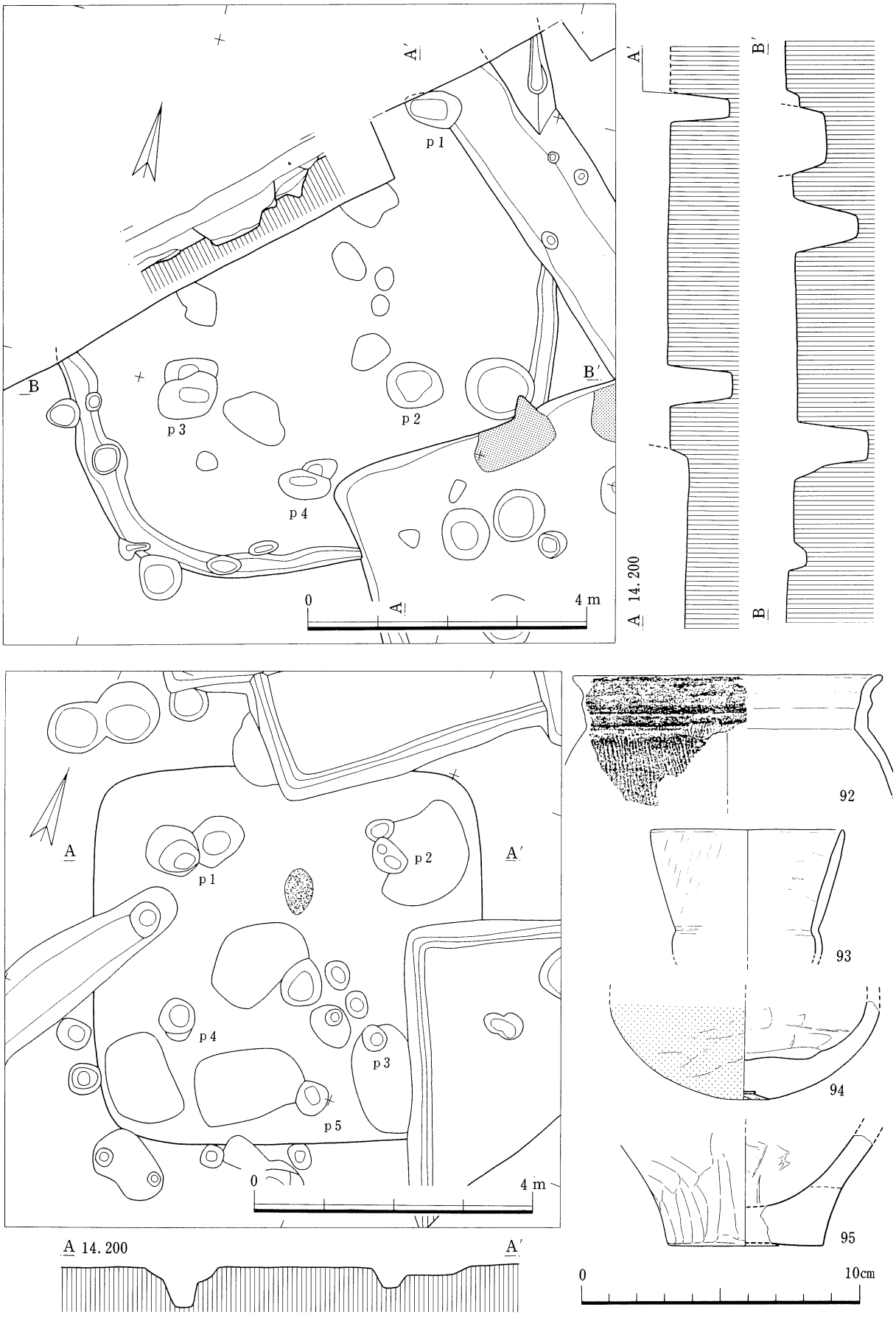


第12図　7・8号遺構と出土遺物

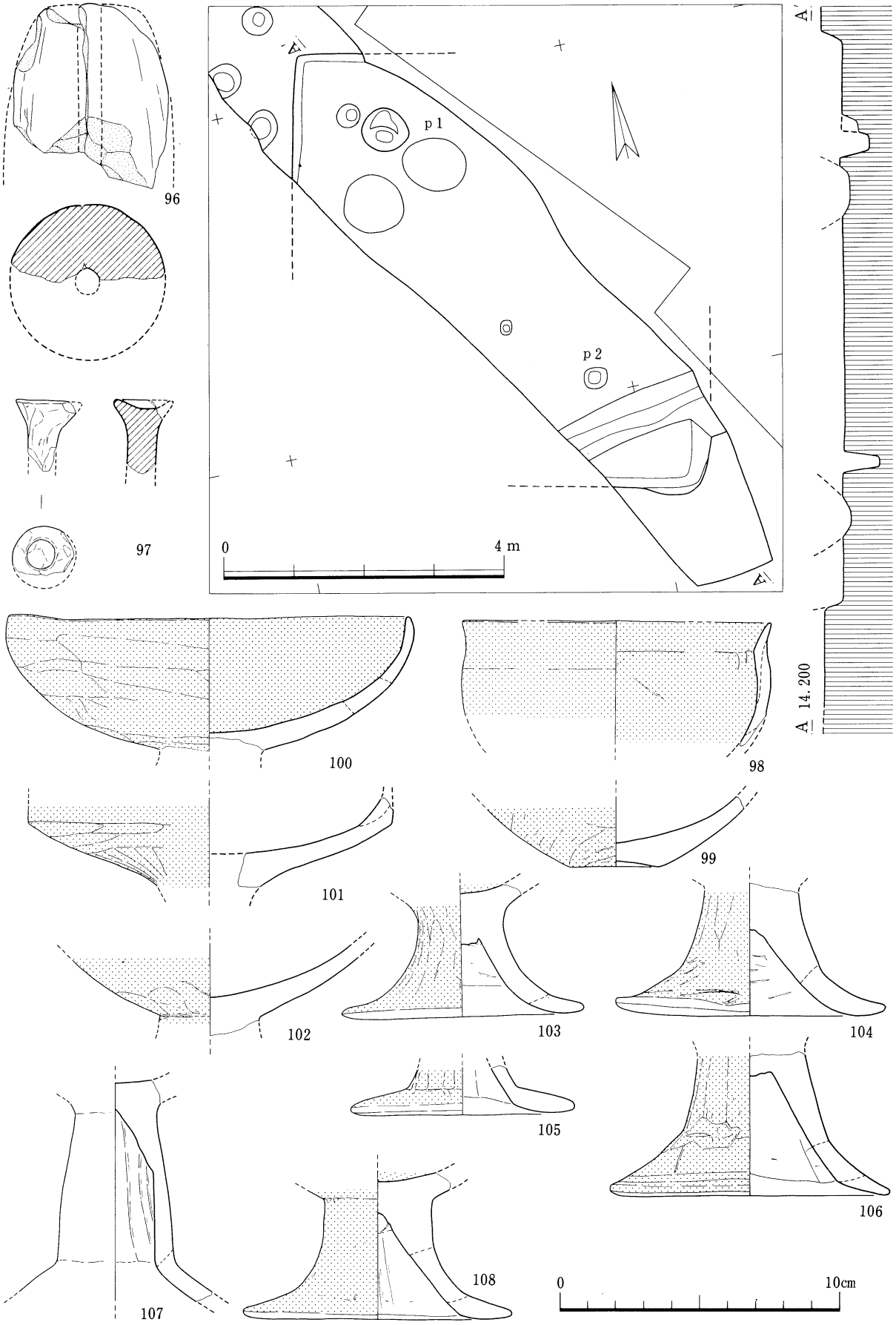


遺物観察表記載もれの遺物
①有孔円盤　黒色
②匂玉　濃緑色，淡緑色斑あり
③管玉　黒色
カマド近くの床面に散在
いずれも，いわゆる滑石製
（①は蛇紋岩製?）

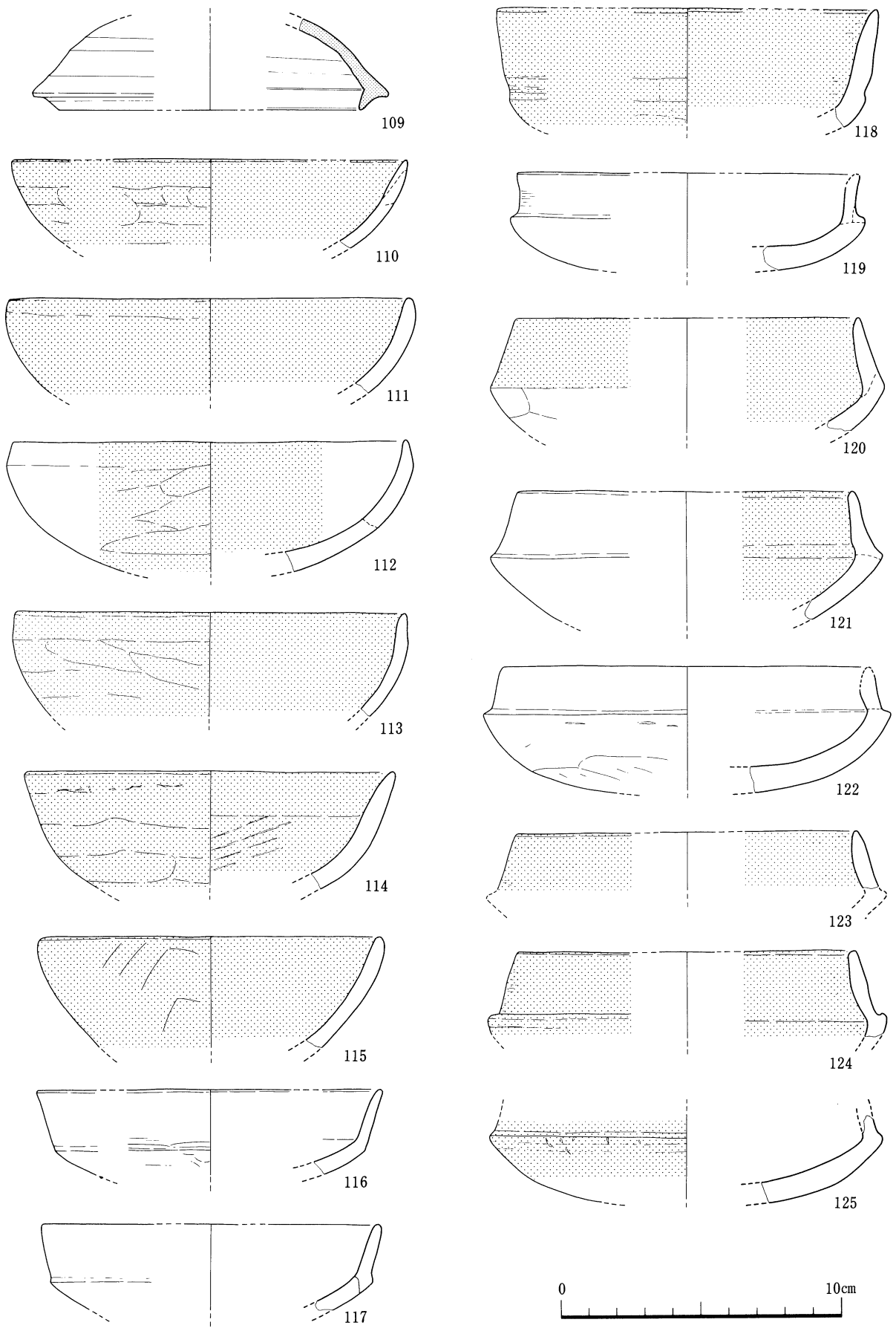
第13図　7・8号遺構出土遺物・11号遺構



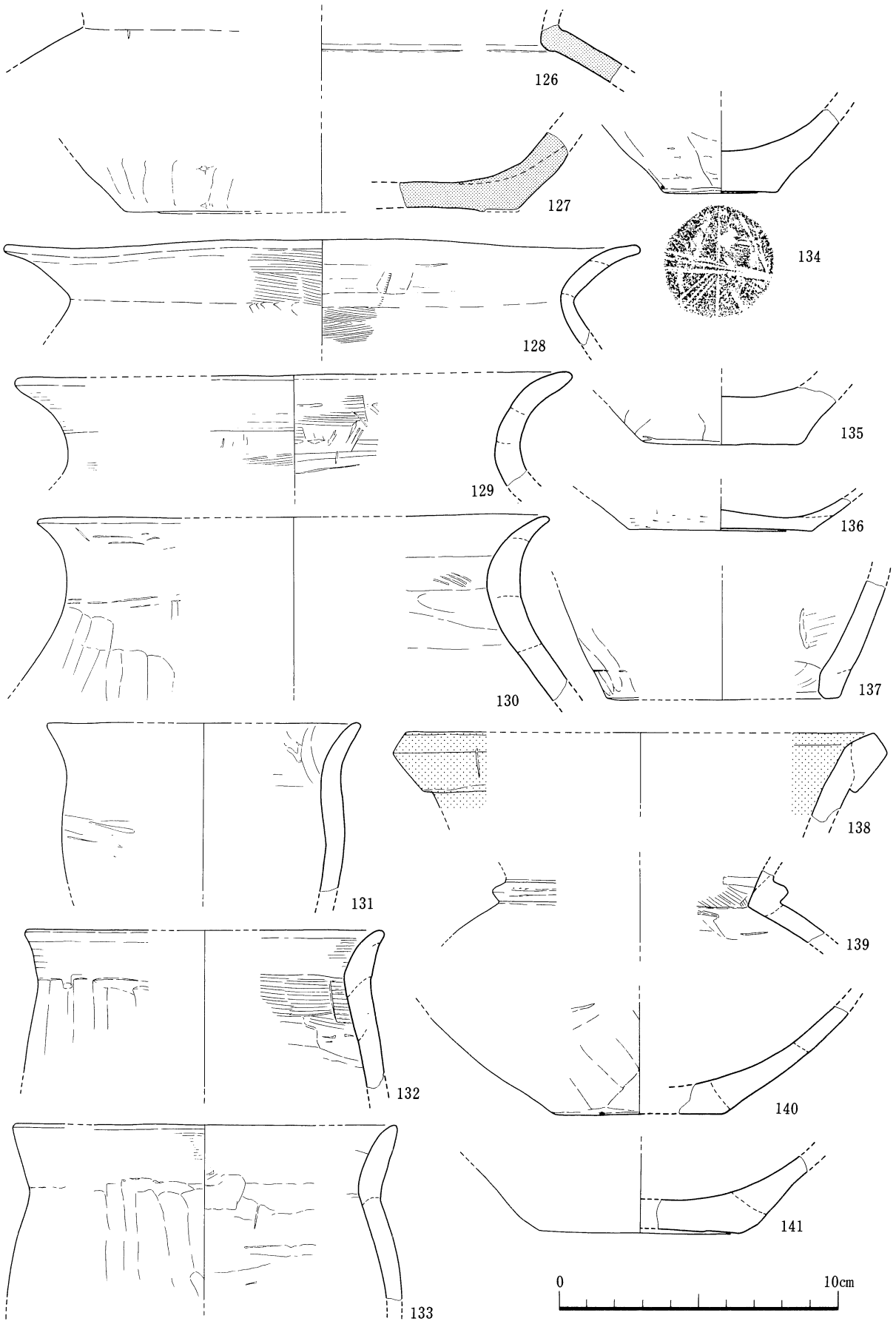
第14図　9・10号遺構と出土遺物



第15図　13・14号遺構と出土遺物

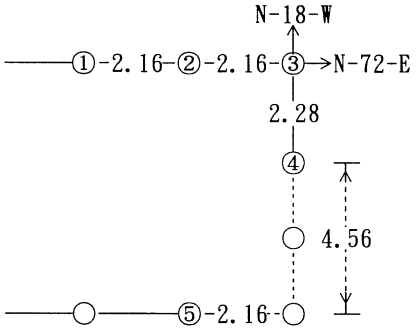


第16図　13・14号遺構出土遺物

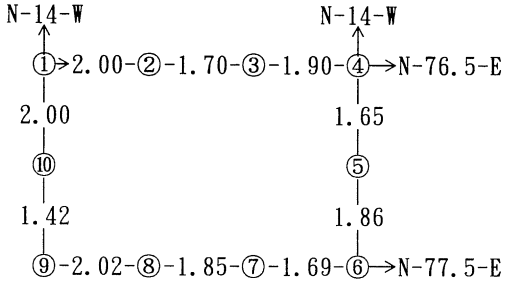


第17図　13・14号遺構出土遺物

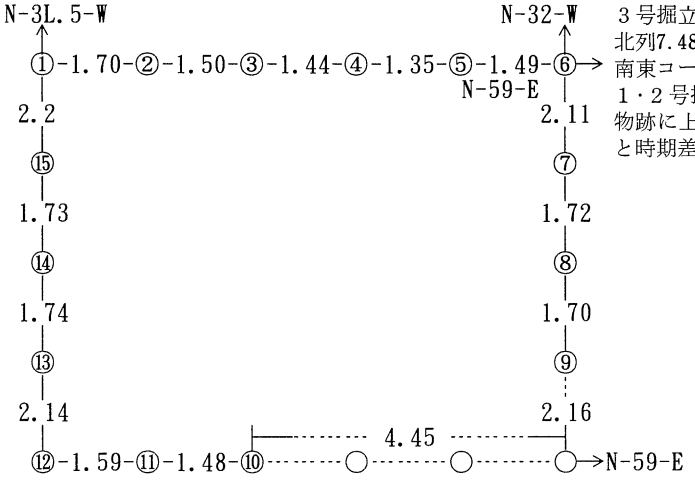
3，遺構一覧　(2)掘立柱建物跡　柱穴間等　単位＝m　N－　単位＝°



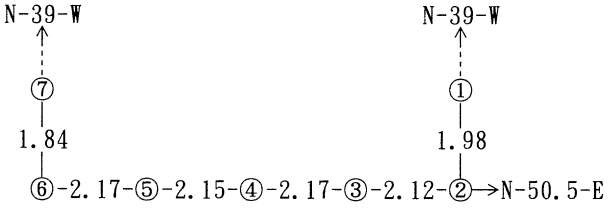
１号掘立柱建物跡　３＋α×３間
北列4.36＋α×東列6.84
７・８・13号遺構と重複して検出した。ｐ１～ｐ５が本遺構の柱穴である。東西に３間以上，南北３間と推定される。５本の柱穴は，３本が７号遺構，１本が13号遺構中で検出され，13号遺構内では住居跡床面が軟弱ではっきりとと確認できなかったが，７号遺構中ではロームによる住居跡の貼り床を除去して柱穴を確認しており，掘立柱建物跡が住居跡より古い事が解る



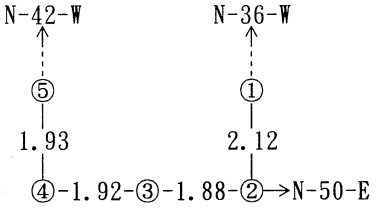
２号掘立柱建物跡　３×２間
北列5.60，南列5.56×西列3.42，東列3.51
３・４・９・15号遺構と重複して検出された。深さの割に径の大きなピットで今回検出した５基以上の掘立中最大である　この掘立もピットの幾つかは，住居跡の貼り床やカマドの下になっており，住居跡よりも古いものである



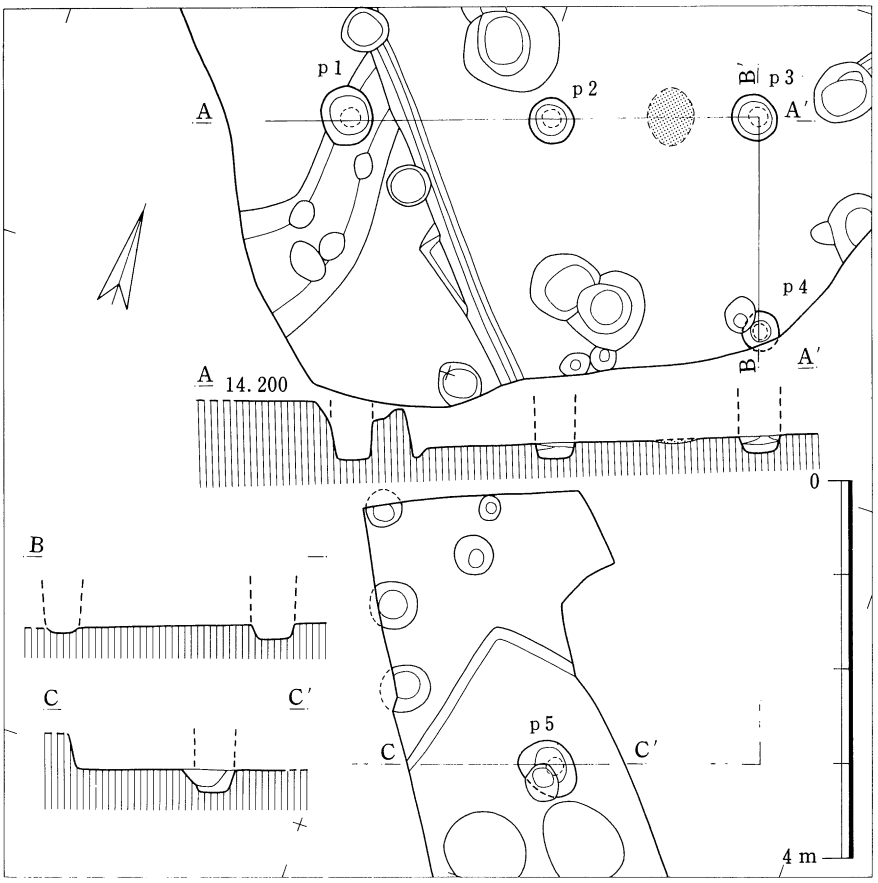
３号掘立柱建物跡　５×４間
北列7.48，南列7.52×西列7.81，東列7.69
南東コーナーから西へ３本は，調査範囲外になり検出できなかった
１・２号掘立柱建物跡に比べ西に向いている　本遺構は16号掘立柱建物跡に上を覆われるほかは他の遺構より新しく１・２号掘立柱建物跡と時期差が有る



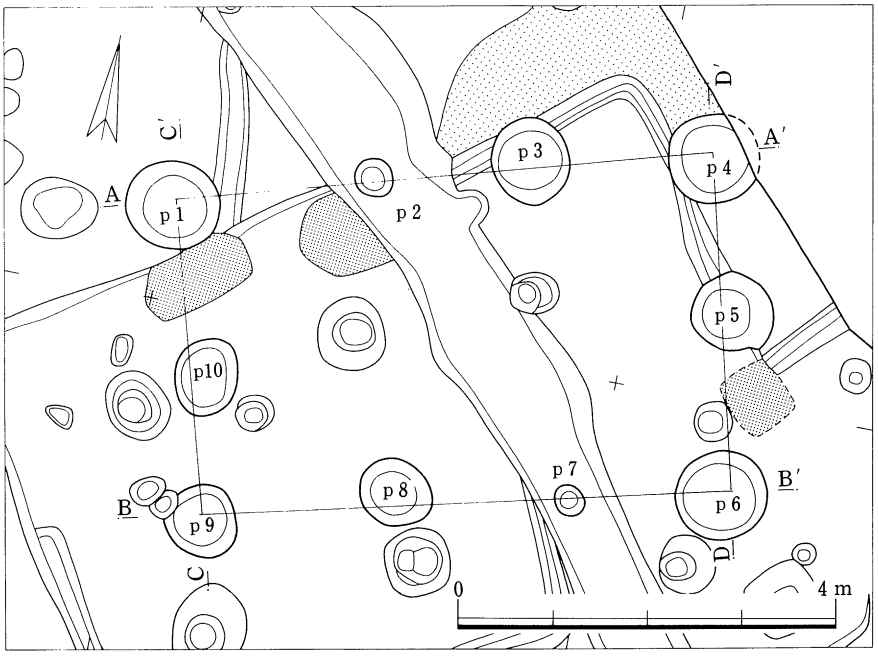
４号掘立柱建物跡　４×２＋α間
南列8.61×西列1.84＋α，東列1.98＋α
１・２号遺構北西で，検出した多数の柱穴は，その形態から掘立柱を形成すると思われるが，組合せとして捉えたのは，４・５号掘立柱建物跡のみだった。４号掘立は，３号掘立とほぼ同同様の方向で，４間×２間以上の規模となる

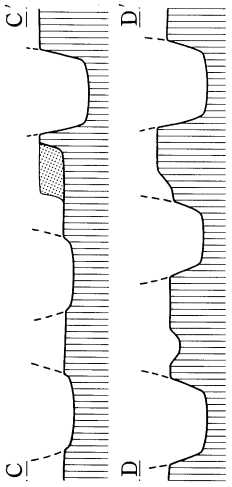


５号掘立柱建物跡　２×２＋α間
南列3.8×西列1.93＋α，東列2.12＋α
３・４号掘立とほぼ同方向で，４号掘立の南西列に接し構築される。２間×２間以上で４号掘立柱建物跡との前後関係は不明である

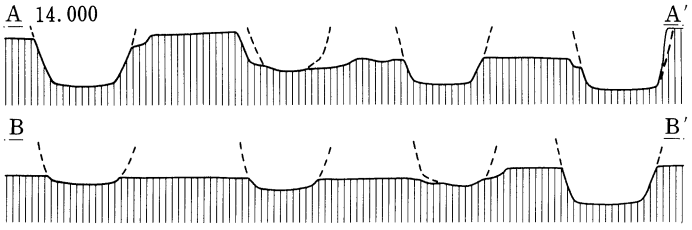


1号掘立柱建物跡

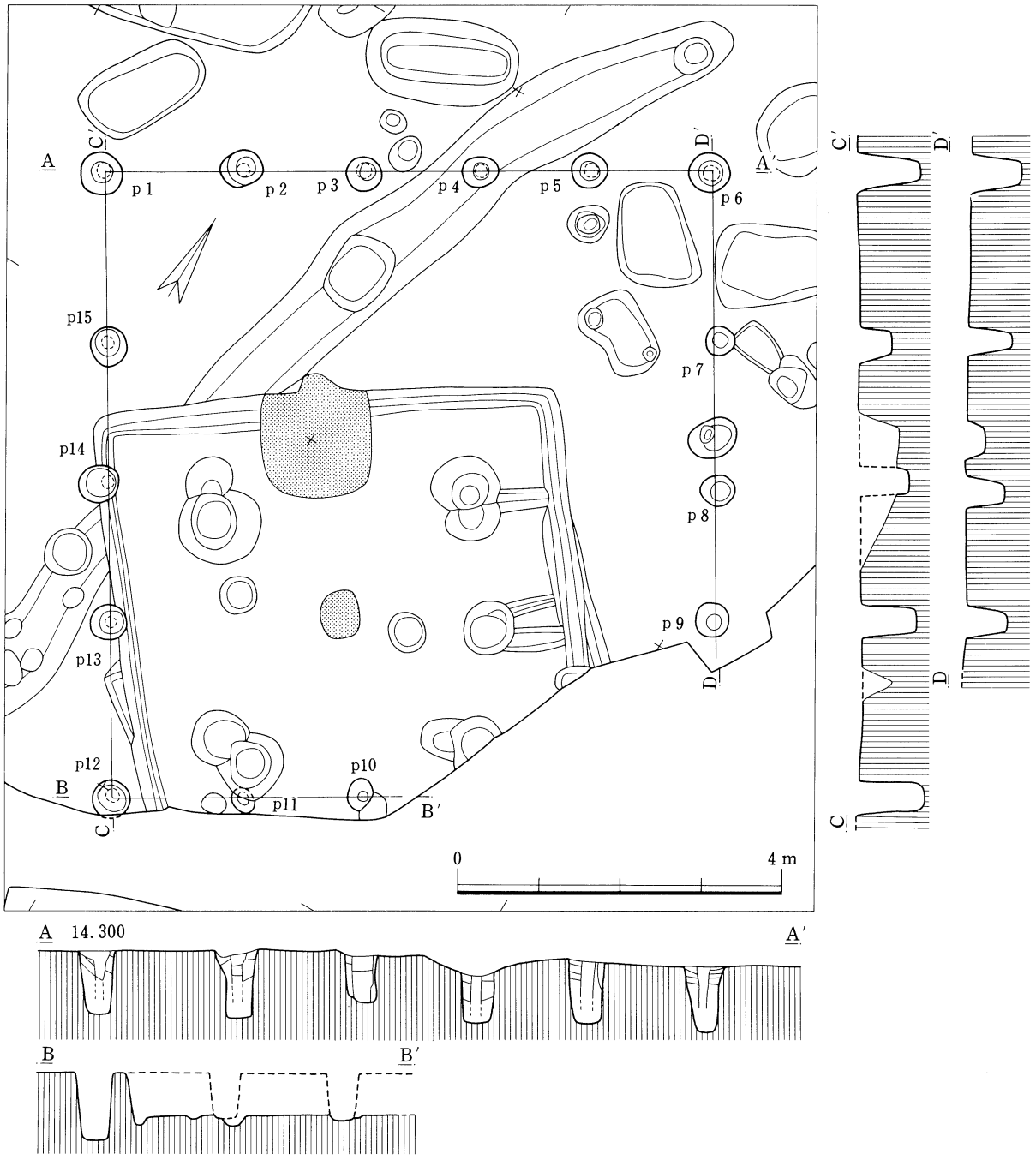




2号掘立柱建物跡



第18図　1・2号掘立柱建物跡



第19図　3号掘立柱建物跡

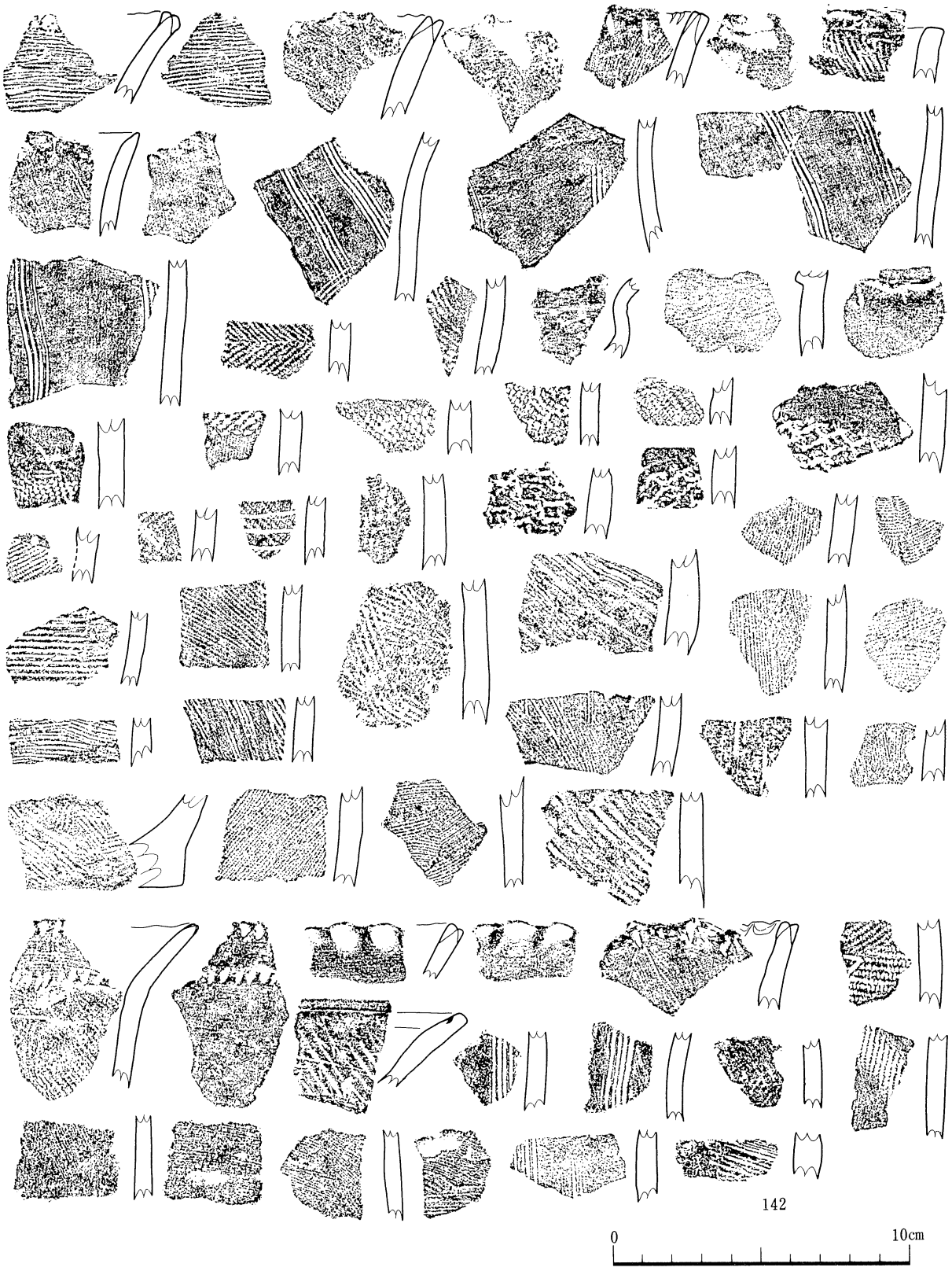
第20図　4・5号掘立柱建物跡

4，遺物観察表

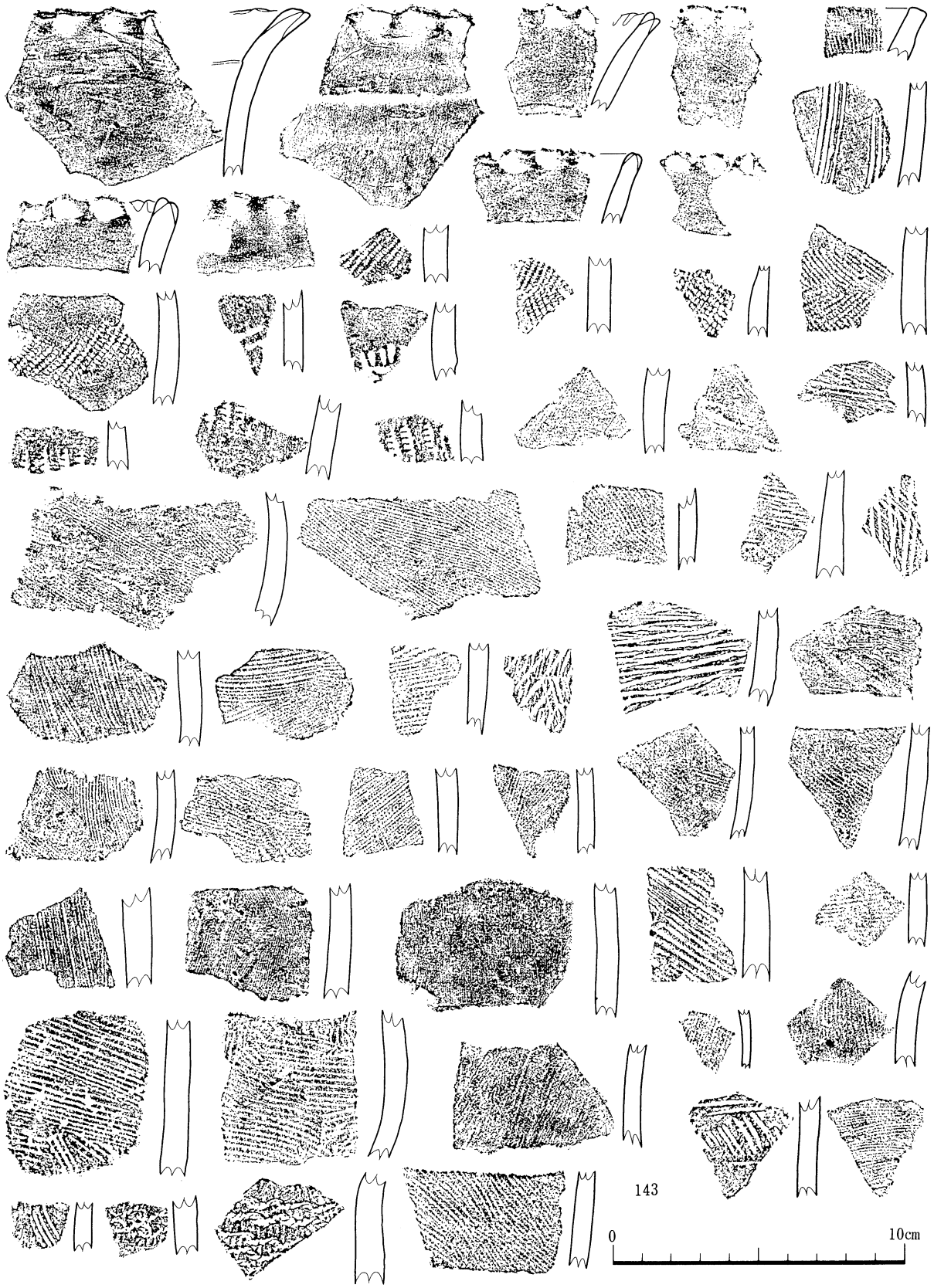
通算番号	遺構別番号	種類	器種	残存状態	大きさ（単位cm）	特徴	胎土 焼成	備考
001	01−01	弥生	甕	完形 数ヶ所欠	高16.3 口15.3 底 5.8	外,縦ヘラ,暗褐色 スス付着 内,茶褐色	良好	器表剥落 内外輪積痕残る
002	01−02	弥生	壺	頸上欠 1/2残存	高14.5 口12.0 胴17.0	外,ヘラ磨き,赤彩縄文除 内,明褐色	軟質	縄文,頸部,胴V状3単位(本来6)
003	01−03	弥生	壺	胴部以下残存	高13.3 胴10.7 底 4.8	外,縦ヘラ 内,横ヘラ,暗赤褐〜暗黄褐色	軟質	器表剥落多い
004	01−04	弥生	壺	底部1/4	高 3.4 底 7.3	外,暗褐〜赤褐色 内,暗褐色	良好	特に無し
005	01−05	弥生	壺	胴下半以下残存	高17.3 胴30＋x 底 9.2	外,斜めヘラ磨き,上部赤彩 内,亀裂	砂粒	特に無し
006	01−06	弥生	壺	口縁部1/4	高 3.5 口 5.7	外,縦ヘラ磨き 内,斜めヘラ,明褐色	微砂粒	波状口縁 外,爪の痕 内,指紋
007	02−01	土製品	紡錘車	完形 2片接合	径 4.8 厚 2.4	外,丁寧なヘラ仕上げ,橙褐色	微砂粒	滑石製紡錘車を模倣する
008	02−02	土製品	紡錘車	1/2	径 4.7 厚 1.9	全面ヘラ磨き,暗褐色	微砂粒	滑石製紡錘車を模倣する
009	02−03	石製品	小型砥石	ほぼ完形	5.8×4.2×2.8	3面研磨下面欠損	凝灰岩	表面に欠けた部分が多い
010	02−04	須恵器	はそう	頸部から上欠損	高 7.9 胴11.7	暗灰色	砂	自然釉肩,底内面に厚くかかる
011	02−05	土師器	杯	口縁部1/4欠損	高 4.5 口13.6	内外赤彩	普通	特に無し
012	02−06	土師器	杯	口縁部1/4欠損		外,ヘラ削り,上赤彩 内,ヘラ磨き,赤彩	小石	特に無し
013	02−07	土師器	杯	完形	高 5.9 口13.5	内全面,外上半赤彩	良好	内1/4周 暗文あり
014	02−08	土師器	高杯	下部1/3	高 6.7 口16.7	外,縦ヘラ削り,内外赤彩,輪積痕	良好	特に無し
015	02−09	土師器	高杯	口縁部20%残存	高 3.9 口16.0	外,縦ヘラ削り,黒斑 内,ヘラ磨き	砂粒	脚部との接合用切込2ヶ所
016	02−10	土師器	甑	口縁〜胴1/3	高10.0 口22.0	外,淡橙褐色,黒斑 赤褐〜淡褐色	軟弱	特に無し
017	02−11	土師器	甑	口縁〜胴下半	高14.8 口19.7	外,縦ヘラ削り 内,ヘラ磨き,赤褐色	緻密	内外輪積痕,口縁部特に目立つ
018	02−12	土師器	甕	口縁部〜頸部	高 5.7 口15.8	口縁部スス付着 外,明褐色 内,暗褐色	普通	頸部下輪積目立つ 指先で押え
019	02−13	土師器	甕	口縁部〜頸部	高 4.3 口14.7	暗赤褐色,黒斑	砂粒	特に無し
020	02−14	土師器	高杯	杯部 口縁1/6現	高 2.7 口17.0	内外赤彩	良好	特に無し
021	02−15	土師器	高杯	杯部口縁1/4弱	高 3.9 口19.8	内外赤彩	砂	特に無し
022	02−16	土師器	高杯	脚部1/2残存	高 7.2	外,縦ヘラ,赤褐色部分的に黒斑	砂	特に無し
023	02−17	土師器	小型壺	口縁〜胴1/3	高 4.8 胴11.8 口 7.6	口縁部横なで 胴部横ヘラ	軟質	特に無し
024	02−18	土師器	甑	底部破片	高 6.2 口 8.4	外,縦ヘラ削り 内,横ナデ,暗褐色	良好	特に無し
025	02−19	土師器	高杯	杯部上半約1/4	高 3.6 口14.8	外,ヘラ削り 内,ヘラ磨き	良好	特に無し
026	02−20	土師器	高杯	杯部口縁1/3	高 4.9 口13.2	内外赤彩	軟質	脚部極度に細い
027	02−21	鉄製品	刀子	刃部のみ	長 3.8 幅 1.2			特に無し
028	03−01	土師器	杯	完形 口縁1/4欠	高 3.4 口11.6	ヘラ磨き,明褐色,口唇近く黒斑	普通	外 粘土乾燥/焼成の亀裂
029	04−01	土師器	杯	1/3現存	高 4.3 口12.8	外,明褐色 内,横磨き後漆仕上げ	軟質	特に無し
030	0 −02	土師器	杯	完形 口縁一部欠	高 5.0 口14.3	外,ヘラ削り 内,ヘラ磨き 内外赤彩	良好	特に無し
031	04−03	土師器	器台	杯部1/3	高 2.3 口 8.7	内,器表やや荒れる	軟質	特に無し
032	04−04	土師器	椀	口縁部破片	高 3.4 口10.8	外,黒〜黒褐色 内,明褐色	普通	特に無し
033	04−05	土師器	椀	1/5	高 4.7 口14.0	細かいヘラ削り 内外赤彩	砂多い	縦方向の暗文あり
034	04−06	土師器	杯	1/5	高 3.8 口13.7	橙褐色	良好	特に無し
035	04−07	土師器	杯	小破片	高 3.0 口15.0	外,暗褐色,黒斑 内,黒色	普通	特に無し
036	04−08	土師器	杯	小破片	高 3.5 口13.6	外,暗褐色 内,黒色	良好	特に無し
037	04−09	土師器	杯	小破片	高 3.4 口12.7		普通	特に無し
038	04−10	土師器	杯	小破片	高 3.0 口11.6		普通	特に無し
039	04−11	土師器	杯	1/2弱	胴14.8	内外赤彩(痕跡)	軟質	特に無し
040	04−12	土師器	杯	小破片	高 3.5	内外赤彩	軟質	特に無し
041	04−13	土師器	杯	口縁部 7cm残	高 4.2 口14.3	内外赤彩	普通	特に無し
042	04−14	土師器	杯	約1/4現存	高 4.5 口不明	外,ヘラ削り 内,ヘラ磨き 内外赤彩	普通	特に無し
043	04−15	土師器	杯	約1/4現存	高 3.6 口12.2	ヘラ磨き 内〜口唇,橙褐色光沢あり	普通	底部ヘラ削り後ナデ
044	04−16	土師器	杯	小破片	高 2.8 口13.1	外,ヘラ削り 内,ヘラ磨き 内外赤彩	良好	特に無し
045	04−17	土師器	杯	小破片	高 3.2 口13.8	内,ヘラ磨き 内外赤彩	良好	特に無し
046	04−18	土師器	壺	底部破片	高 4.3 底 6.2	外赤彩	軟質	特に無し
047	04−19	土師器	甕	底部破片	底 5.7	赤褐色	普通	特に無し
048	04−20	土師器	壺	底部破片	高 2.1 底 6.0	外,縦ヘラ整形 内,ヘラ磨き 黄褐色	良好	特に無し
049	04−21	土師器	甕	底部破片	底 5.0	外,赤褐色 内,黒〜黒褐色	普通	特に無し
050	04−22	土師器	高杯	脚部小破片	高 3.4 脚 7.4		普通	特に無し

通算番号	遺構別番号	種類	器種	残存状態	大きさ（単位cm）	特徴	胎土焼成	備考
051	04－23	土師器	高杯	脚部1/3	高 3.7　脚 6.8	斜めヘラ削り，黄褐色	普通	特に無し
052	04－24	土師器	甑	底部破片	高 4.7　径 7.8	内外，縦ヘラ磨き，暗褐～赤褐色	砂	特に無し
053	04－25	須恵器	？	底部破片	高 6.4　径不明	青灰色	微砂粒	特に無し
054	04－26	須恵器	杯	底部破片	高 1.9　底 5.9	暗灰色	良好	特に無し
055	04－27	土師器	甕	口縁～胴下半	高20.3　口20.2		普通	特に無し
056	04－28	土師器	甕	口縁部破片	高 4.5　口18.6	口唇，スス付着 胴，橙褐色 内，暗褐色	微砂粒	接合部から剥離
057	04－29	土師器	甕	口縁部破片	高 6.3　口13.6	外，縦ヘラ削り 内，横ヘラ，暗褐色	普通	特に無し
058	04－30	土師器	甕	口縁6cm～胴	高 6.3　口13.7	外，スス付着，黒色 内，暗褐色	良好	輪積痕顕著 比較的小型
059	04－31	土師器	？	底部破片	高 1.4　底 9.5		砂粒	特に無し
060	04－32	土師器	甕	底部破片	高 2.8　底 7.2	ヘラ削り，明褐～赤褐色	砂	特に無し
061	04－33	土製品	土玉	完形	高 3.0 径 3.6 孔 0.6	赤褐色	良好	特に無し
062	04－34	土製品	土玉	2片接合　3/4	高 3.8　径 3.4	明褐色	良好	特に無し
063	04－35	鉄製品	刀子	柄と刃部の一部	0.3×0.5 3.4			特に無し
064	04－36	鉄製品	刀子	柄破片	0.4×0.4～0.6×0.6			特に無し
065	04－37	土製品	支脚	基部欠損	長19.3 基部5.5角	断面形隅円方形，赤褐～明褐色	砂	特に無し
066	06－01	石製品	小型砥石	完形	6.8×4.7×2.8		砂岩	6面研磨 傷/剥落多い
067	06－02	土師器	甑	底部破片			普通	特に無し
068	06－03	土師器	杯	小破片	高 3.2　径不明		普通	特に無し
069	06－04	土師器	杯	口縁部破片	高 3.7　径不明	内外赤彩	普通	特に無し
070	06－05	土師器	杯	口縁部破片	高 5.5　口13.6	内，全面 外，上半赤彩	普通	底面ヘラ削り
071	06－06	土師器	杯	口縁部1/4現存	高 2.9　口13.6	火熱を受け変色 スス付着	普通	特に無し
072	06－07	土師器	高杯	口縁部破片	高 2.7　口15.0	体部，ヘラ削り 外，赤彩	普通	特に無し
073	06－08	土師器	甕	底部破片	底 8.1	黒褐色	良好	底部木葉底
074	06－09	須恵器	甕	口縁～底	14片		良好	数個体
075	07－01	須恵器	杯蓋	小破片	高 2.0　口 9.2	青灰色	良好	特に無し
076	07－02	須恵器	杯身	小破片	高 4.2　口10.2	青灰色	良好	特に無し
077	07－03	須恵器	杯	破片 口縁7cm残	高 4.1　口13.8	淡黄灰色	砂	特に無し
078	07－04	須恵器	杯	小破片	高 3.2　口16.3	暗灰色	砂	特に無し
079	07－05	須恵器	杯蓋	小破片	高 2.5　口15.0	暗灰色	砂	特に無し
080	07－06	須恵器	杯	小破片	高 4.1　口12.8	暗灰色	砂	特に無し
081	07－07	土師器	杯	口縁部破片	高 3.2　口不明	ヘラ磨き	軟質	特に無し
082	07－08	土師器	杯	小破片	高 4.6　口不明	内外赤彩	良好	特に無し
083	07－09	土師器	小型甕	口縁～胴 1/4現	高 4.9　口13.7	外，赤褐色，黒斑 内，黒～黄褐色	普通	特に無し
084	07－10	土師器	甕	口縁部破片	高 5.6　口22.0	赤褐色	砂粒	特に無し
085	07－11	土師器	甕	口縁部破片	高 6.3　口22.1		普通	特に無し
086	07－12	土師器	甕	口縁～胴 1/4現	高 8.6　口21.2	赤褐色	砂粒	特に無し
087	07－13	土師器	小型甕	口縁部破片	高 2.9　口14.0	黄褐色	微砂粒	特に無し
088	07－14	土師器	甕	底部破片	底 6.8	外，ヘラ削り，暗褐色 内，黒色	砂粒	特に無し
089	07－15	土師器	甕	底部破片	底 5.8	外，黄褐色 内，黒褐色	普通	特に無し
090	07－16	土師器	器台	端部欠 杯一部残	高 2.4　脚 1.8	杯部内赤彩	普通	ミニチュア
091	07－17	土製品	円盤状	完形	3.6×3.0×1.4	赤褐色	良好	特に無し
092	10－01	土師器	小型甕	口縁～胴部上半	口11.1　胴12.3	暗赤褐色	砂粒	特に無し
093	10－02	土師器	坩	口縁部～胴部	高 4.5　口 7.0	縦ヘラ削り，黄褐色	微砂粒	特に無し
094	10－03	土師器	坩	胴～底部1/4現存	高 4.5　口 6.9	外，赤彩 内，黒褐色	緻密	特に無し
095	10－04	土師器	甕	底部破片	高 4.0　底 5.4	外，縦ヘラ整形，暗赤褐色 内，ヘラ磨き	砂粒	特に無し
096	13－01	土製品	管状土錘	2片接合 1/4現	径5.5＋x　長6.6＋x	明褐色	普通	特に無し
097	13－02	土製品	器台	上下欠損	上部2.4　軸部1.0	黄褐色	普通	ミニチュア
098	13－03	土師器	鉢	口縁部破片	高 4.5　口10.8	内外赤彩	軟質	胴部接合部から剥離
099	13－04	土師器	坩	底部破片	高 2.4　底 3.3	外，赤彩 内，暗黄褐色	砂粒	特に無し
100	13－05	土師器	高杯	杯部 口縁1/3欠	高 4.7　口14.3	外，ヘラ削り 内，ヘラ削り 内外赤彩	良好	特に無し

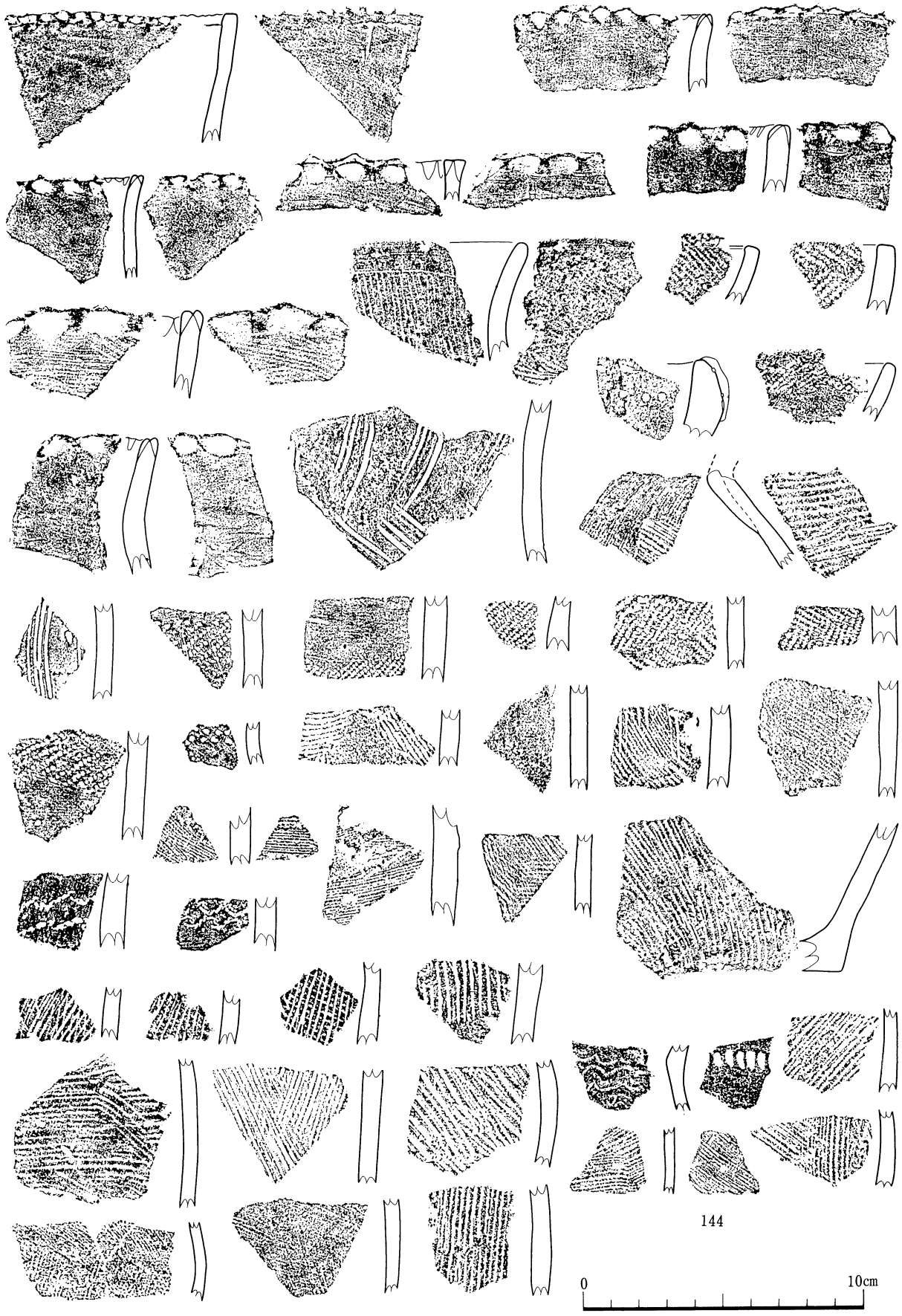
通算番号	遺構別番号	種類	器種	残存状態	大きさ（単位cm）	特徴	胎土焼成	備考
101	13−06	土師器	高杯	杯部 小破片	高 3.2 口13.0	外,赤彩	普通	特に無し
102	13−07	土師器	高杯	脚部 上下欠損	高 3.2 口不明	外,赤彩(薄い) 内,暗赤褐色	普通	特に無し
103	13−08	土師器	高杯	脚部 杯部1部残	高 4.7 脚 8.7	内外赤彩	良好	特に無し
104	13−09	土師器	高杯	脚部	高 4.8 脚 9.7	外,ヘラ削り後横ナデ,赤彩 内,明褐色	軟質	特に無し
105	13−10	土師器	小型高杯	脚部 1/3現存	高 1.8 脚 8.0	外,赤彩	普通	特に無し
106	13−11	土師器	高杯	脚部 端部一部欠	高 5.1 脚10.0	外,縦ヘラ削り,赤彩 内,橙褐色	砂多い	特に無し
107	13−12	土師器	高杯	脚部 端部欠損	高 7.9	明褐色	良好	特に無し
108	13−13	土師器	高杯	脚部 杯部一部現	高 5.3 脚 9.6	内外赤彩	良好	脚上部小亀裂あり
109	13−14	須恵器	杯蓋	小破片	高 3.4 口10.8	青灰色	良好	特に無し
110	13−15	土師器	杯	小破片	高 3.2 口14.1	外,横ヘラ削り 内,ヘラ磨き 内外赤彩	緻密	特に無し
111	13−16	土師器	杯	小破片	高 4.0 口14.8	内外赤彩	良好	特に無し
112	13−17	土師器	杯	底部欠損	高 4.6 口14.0	器表荒れる 内外赤彩(薄い)	普通	特に無し
113	13−18	土師器	杯	底部欠損 1/4現	高 3.6 口13.9	器表あれる 内外赤彩	砂粒	特に無し
114	13−19	土師器	杯	底部欠損 1/4現	高 4.2 口13.2	内外赤彩	良好	特に無し
115	13−20	土師器	杯	底部欠損 1/6現	高 3.9 口12.2	内外赤彩	良好	特に無し
116	13−21	土師器	杯	底部欠損	高 3.0 口12.4	外,暗赤褐色 内,明褐色	普通	特に無し
117	13−22	土師器	杯	底部欠損	高 3.1 口12.3	外,ヘラ削り 口唇,ヘラ磨き,黒〜黒褐色	普通	特に無し
118	13−23	土師器	杯	底部欠損	高 4.2 口13.6	内外赤彩	普通	特に無し
119	13−24	土師器	杯	底部欠損	高 3.4 口不明	ヘラ磨き 淡黄褐色	良好	特に無し
120	13−25	土師器	杯	底部欠損 破片	高 4.2 口13.3	内,全面 外,上半	緻密	特に無し
121	13−26	土師器	杯	底部欠損 破片	高 4.5 口不明	外,赤褐色 内,赤彩	軟質	特に無し
122	13−27	土師器	杯	底部欠損 1/2弱	高 4.8 口13.2	外,ヘラ削り	軟質	特に無し
123	13−28	土師器	杯	底部欠損 1/4現	高 2.1 口12.2	内外赤彩	軟質	特に無し
124	13−29	土師器	杯	底部欠損 破片	高 3.1 口不明	内外赤彩	良好	特に無し
125	13−30	土師器	杯	底部・欠損 1/3現	高 3.1 胴14.0	内,全面 外,上半	軟質	特に無し
126	13−31	須恵器	甕	頸部のみ		灰白色 器表に自然釉	緻密	特に無し
127	13−32	須恵器	甕	底部破片	高 3.8 底13.7	器表外面剥落多い,淡黄褐色	小石	特に無し
128	13−33	土師器	甕	口縁〜頸1/4現	高 3.8 口22.8	黄褐色	微砂粒	特に無し
129	13−36	土師器	甕	口縁部破片	高 4.1 口不明	横ハケ整形,赤褐〜暗褐色	普通	特に無し
130	13−35	土師器	甕	口縁部〜胴上半	高 6.5 口不明	胴部,縦ヘラ削り	微砂粒	特に無し
131	13−36	土師器	甕	口縁部〜胴部	高 6.0 口10.2		普通	特に無し
132	13−37	土師器	甕	口縁部〜胴上半	高 5.7 口12.9		普通	特に無し
133	13−38	土師器	甕	口縁〜胴上半	高 6.3 口13.5		普通	特に無し
134	13−39	土師器	壺	底部破片	高 3.0 底 4.2	赤褐色	良好	木葉底
135	13−40	土師器	壺	底部破片	底 5.6		普通	特に無し
136	13−41	土師器	杯	底部破片	底 6.6	明橙褐色	普通	底部糸切後ヘラ整形
137	13−42	土師器	甑	底部破片	高 4.2 底 8.5		普通	特に無し
138	13−43	土師器	壺	口縁部破片	口不明	内外赤彩	普通	特に無し
139	13−44	土師器	壺	頸部破片	口不明	内外赤彩	普通	特に無し
140	13−45	土師器	壺	底部破片	高 3.9 底 6.0	黒褐色	砂粒	特に無し
141	13−46	土師器	壺	底部破片	底 7.3		普通	特に無し
142	01−07	弥生	土器片	53片				
143	09−01	弥生	土器片	45片				
144	その他	弥生	土器片	46片				
145	その他	縄文	土器片	11片				
146	06−10	石器	叩き石	完形	10.2×7.0×4.2			
147	06−11	石器	叩き石	完形	3.6×3.4×1.9			
148	13−47	石器	磨き石	一部欠損	7.9×4.2×3.5			
149	06−12	石器	磨製石斧	刃部破片	3.7×3.3×1.8			



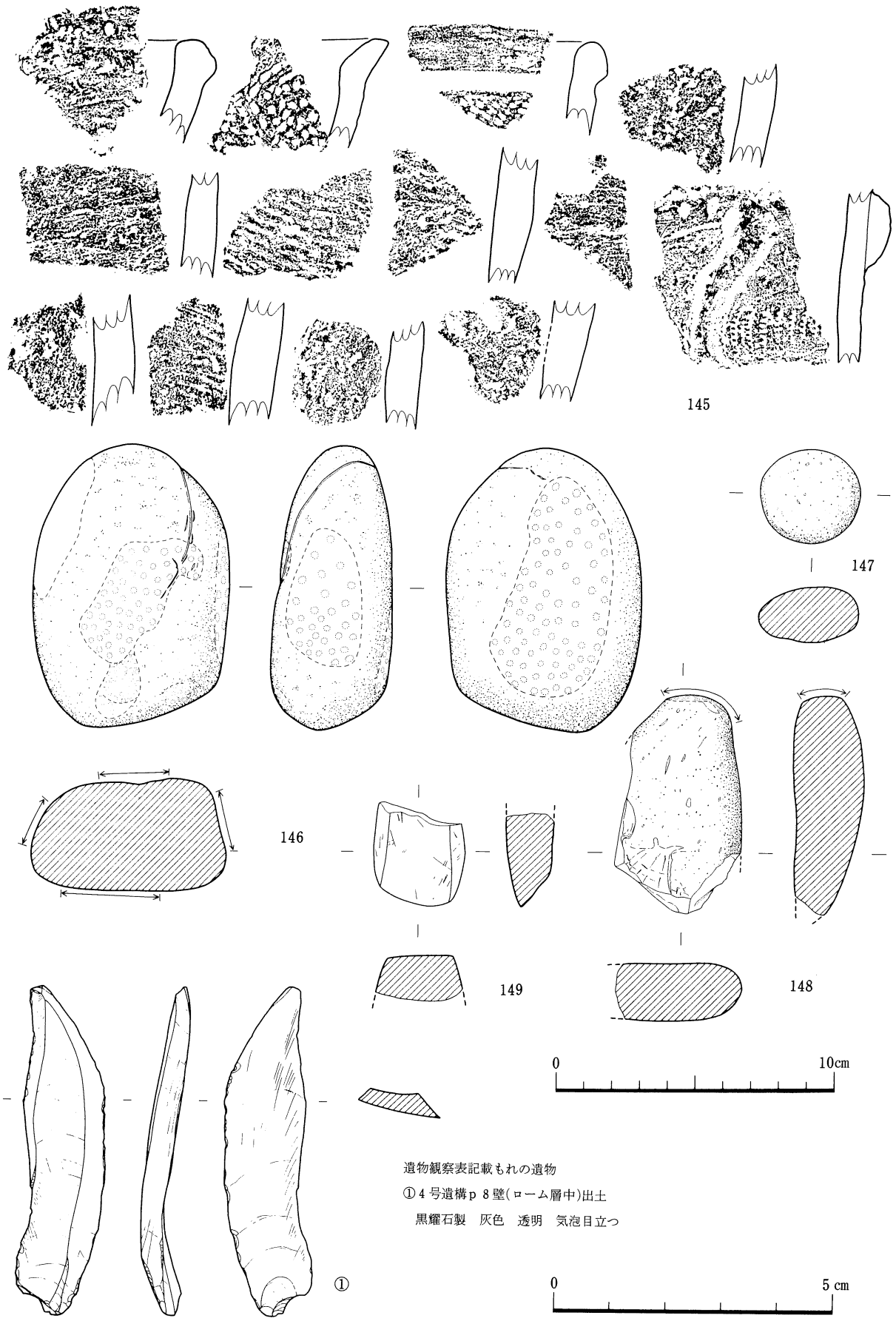
第21図　1号遺構出土遺物拓本



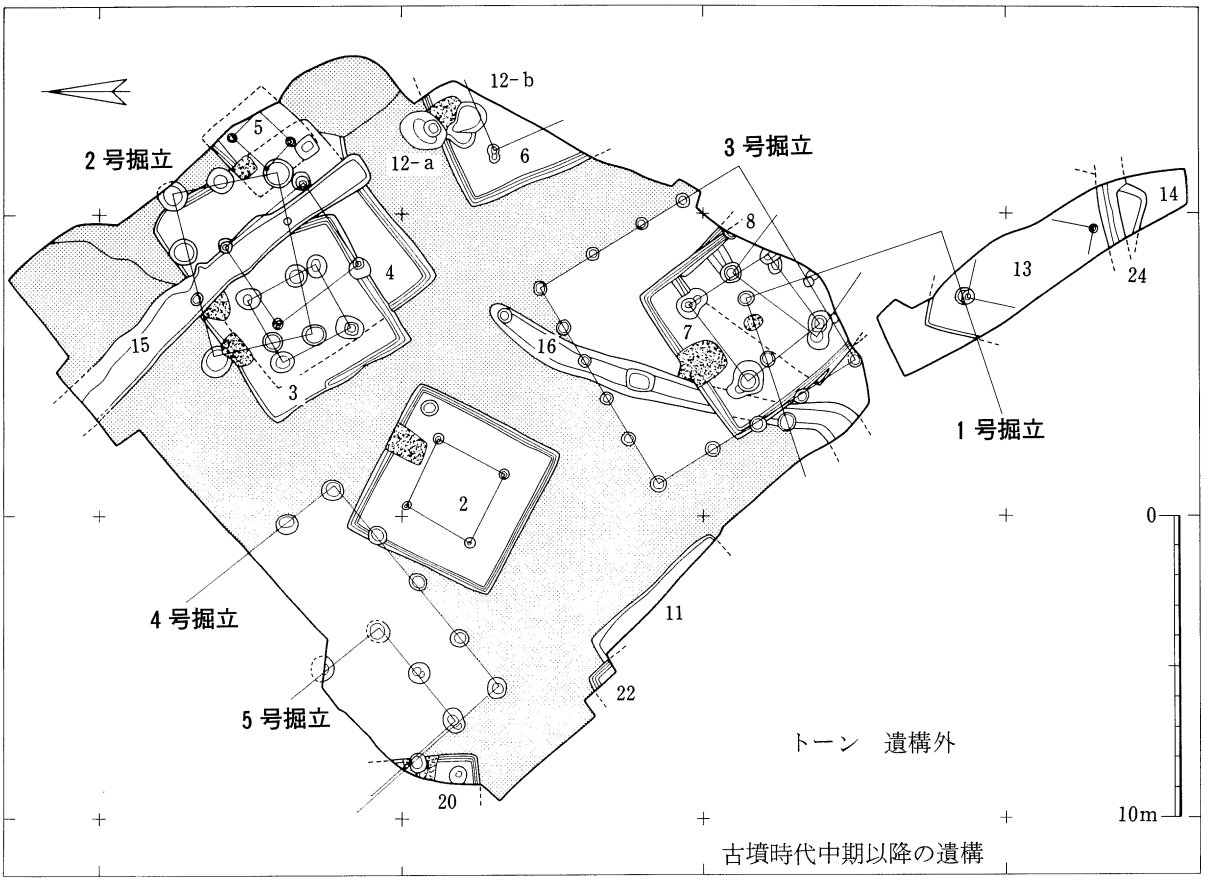
第22図　9号遺構出土遺物拓本

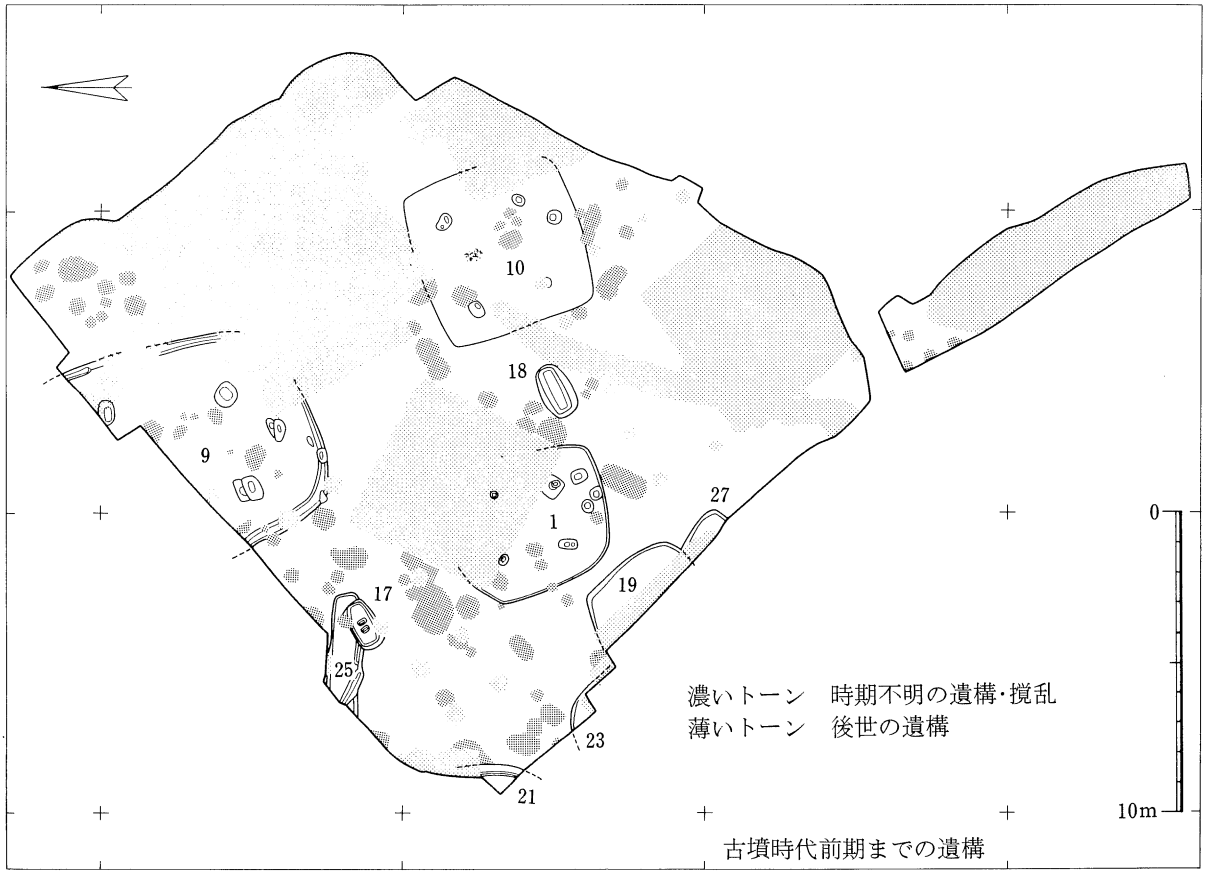


第23図　遺構外出土遺物拓本



第24図　遺構外出土遺物拓本，石器実測図





第25図　尾梨遺跡時期別遺構配置図

Ⅲ　ま　と　め

調査対象が狭く，撹乱も多い遺跡である。しかし，隣接する潤井戸西山遺跡の遺構分布から多くの遺構の存在が想定でき，結果としては，期待を裏切らず数多くの遺構を調査することができた。　弥生時代の遺構(１・９・19・21・23・27号遺構)は，西山遺跡で検出された環濠で囲まれた集落を構成する住居跡で，時期も同様に宮ノ台期である。環濠の形態や遺構の密度から，集落の中心はさらに北西側に存在するものと思われる。

１号遺構は，貯蔵穴付近にセットとして捉えられる土器が一括して検出された。９号遺構は，長軸推定９ｍの大型住居跡でそれに見合って柱穴も大きく深いものだった。いずれの住居跡もロームへの掘り込みが浅く，床面に撹乱が達していた。

古墳時代前期の遺構(10号遺構)は１基だけで，西山遺跡では五領期の住居跡が，北東から入り込む浅い谷にそって並び，五領期の集落は，弥生時代や古墳時代後期の集落とは異なり10号遺構が北端のようである。この住居跡もロームへの掘り込みは非常に浅く，確認面が床面という状況で，遺物もここにわずかに残っていただけである。

古墳時代後期の住居跡(２・３・４・５・６・７・８・11・13・14・20・22号遺構)は，西山遺跡でも北側に集中して濃密に分布していた。草刈尾梨遺跡でも，その続きの遺構群が調査されたが，後期鬼高式でも比較的古い時期に集中しているようである。市原では，鬼高式の住居跡は古い段階ではカマドが北東でその脇に貯蔵穴があり，新しくなるに従い西にカマドが移動し，貯蔵穴がなくなる傾向がある。これからすると２・20号遺構が古く，４号遺構は貯蔵穴とカマドの関係から東から西にカマドが造り替えられたことが判る。５・６号遺構はそれに続く時期の物であろう。３・４号遺構，７・８号遺構では，わずかに移動して立て替えられた様子がうかがえる。

西山遺跡の調査で検出された柵列は，今回は確認されなかったが前回１基のみだった掘立柱建物跡は，今回５基を調査した。５基の建物跡は大きく２時期に分けられる。１期は，１・２号掘立柱建物跡で鬼高期の住居跡より古いことが判っている。建物の方向は(Ｎ－18～14°－Ｗ・Ｎ－72～77.5°－Ｅ)で，これは西山遺跡で調査した柵列(Ｎ－14°－Ｗ・Ｎ－75°－Ｅ)と同方向である。２期は，３・４・５号掘立柱建物跡で，どの住居跡よりも新しく，(Ｎ－32～42°－Ｗ・Ｎ－50～50°－Ｅ)と１期と比べ14～28度西に向く。両期とも，西山遺跡のＲ－１号掘立柱建物跡(Ｎ－84°－Ｗ・Ｎ－６°－Ｅ)と向きに大差がある。

このことから鬼高期直前から中頃までの間とその後に，１期建物群→竪穴住居跡群→２期建物群→西山遺跡Ｒ－１号掘立柱建物跡という変遷をたどることができる。

１号掘立柱建物跡，３号掘立柱建物跡は共に大型で同位置に造られており，２号掘立柱建物跡は１号の北東，４・５号掘立柱建物跡は２号の北側といずれも右奥に東西に向いた建物が並ぶ。これらの事から，主殿とその奥に並ぶ付属の建物あるいは倉庫といった性格が考えられる。

特に１期の建物は，西山遺跡の柵列と同方向で，南側の四脚門の正面に１号掘立柱建物跡が位置することから柵列と同時期である可能性が強く，四脚門を中心にした東西75ｍの居館址が想定できる。北関東に多い居館址は周囲に濠を廻らせており，尾梨遺跡の例との間に差がある。これが地域差なのか，といった点はさだかではないが，調査地点の北及び西側がまだ未調査で残されており，解明の可能性は将来の課題としておきたい。

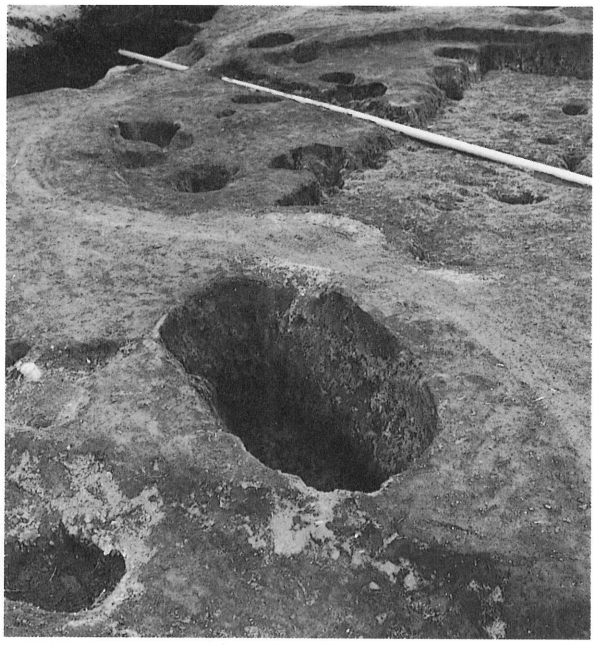
写　真　図　版

図版 1

1・2 号遺構,
4・5 号掘立柱建物跡確認状況

1・2 号遺構

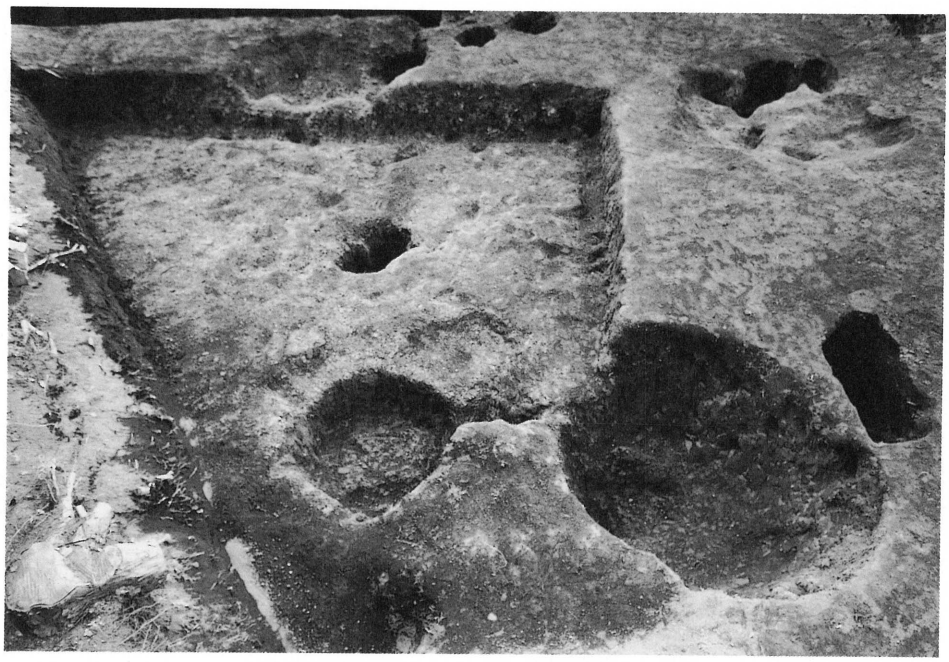
左　2 号遺構遺物出土状況
右　18号遺構(手前),
　　1 号遺構(奥)



3・4・5 号遺構,
2 号掘立柱建物跡

9 号遺構

3・4・5・9・15号遺構



6・12－a・12－b号遺構

7・8号遺構,
3号掘立柱建物跡

7・8号遺構

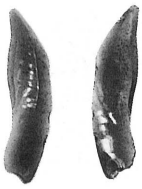
13･14号遺構

17･25号遺構

調査終了後全景

弥生時代までの遺物

縮尺 1：2.5

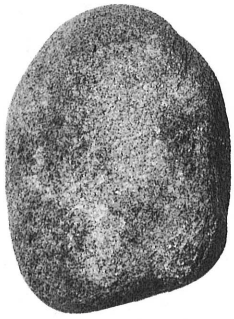


24－①

91

148

147



146

149

6

1

2

（2　縄文部アップ）

5

3

古墳時代の遺物

66

90

97

7

8

65

61

62

13－③

13－①

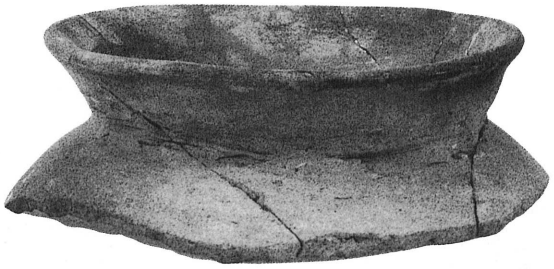
13－②

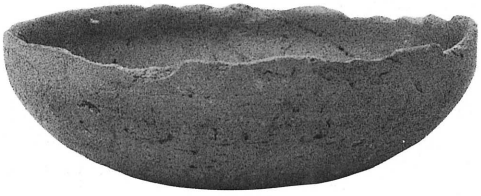
63

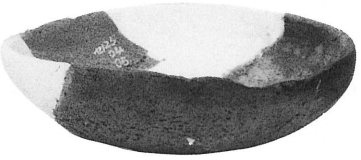
64

27

10


18


30


28

31

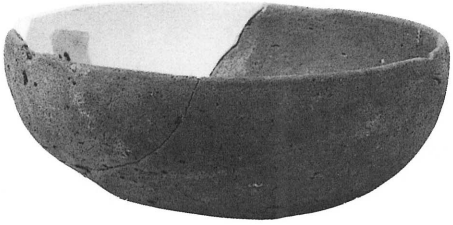
13

104

106

70

17


12

財団法人　市原市文化財センター調査報告書　第46集

―― 千葉県市原市 ――

草 刈 尾 梨 遺 跡

平成４年３月25日　印刷
平成４年３月30日　発行

編　集　　財団法人　市原市文化財センター

発　行　　三 井 石 油 株 式 会 社
財団法人　市原市文化財センター
千葉県市原市能満1489番地
ＴＥＬ　0436（41）９０００

印　刷　　三 陽 工 業 株 式 会 社
千葉県市原市五井5510－１
ＴＥＬ　0436（22）４３４８